

令和2年度

ジェンダー問題 調査・研究支援事業 報告書

女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題：福岡県内の大学を対象として



北九州市立男女共同参画センター **ムーブ**

発行に寄せて

北九州市立男女共同参画センター・ムーブは、平成7年7月の開所以来、男女共同参画社会の形成の推進と理解を深めることをめざし、さまざまな事業を展開して参りました。

平成9年度から実施している「ジェンダー問題 調査・研究支援事業」は、男女共同参画社会形成にとって課題となっている問題を、ジェンダーの視点から掘り起こし、問題解決に取り組む市民グループや研究者を公募し、調査・研究費の一部を助成・支援するもので、今回で24回目を迎えます。公募する調査・研究テーマは、「第4次北九州市男女共同参画基本計画」（令和元年6月策定）に基づいた、自由課題を設定しました。

今年度は、「女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題：福岡県内の大学を対象として」というテーマで調査・研究を行う研究者に対して支援を行いました。福岡県内の大学において出産・育児を体験している女性研究者を対象としてインタビュー調査を行い、研究と育児の両立についての現状や、研究者として仕事を続けていくうえでの課題を浮かび上がらせることによって、育児中の女性研究者への支援制度のあり方や問題解決のための取り組みについて提言しています。

この調査報告書が、社会における女性研究者を取り巻く現在の状況についての理解と関心を深めることにつながり、課題解決のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査・研究報告書の発行にあたり、ご協力いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
所 長 江 副 春 之

女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題
：福岡県内の大学を対象として

西南学院大学 博士研究員・非常勤講師

平川 知佳

目 次

報告書概要	1
第1章 調査・研究について	5
1 はじめに	5
2 調査の方法	7
3 アンケート調査の結果	9
第2章 聞き取り調査結果	11
1 研究について	11
2 生活について	13
3 仕事と育児の両立	18
4 今のあなたご自身について	20
第3章 女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題	24
1 自分の「研究」を進めることができない葛藤	24
2 非常勤講師の悩み	28
3 周囲のサポートと性別役割分担意識	31
4 理系の女性研究者の実態	38
第4章 まとめと今後の課題	42
1 まとめ	42
2 今後の課題と提言	43
おわりに	46
引用・参考文献一覧	48
調査票	49

報告書概要

■調査・研究題目

女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題：福岡県内の大学を対象として

■研究者名

平川 知佳（西南学院大学 博士研究員・非常勤講師）

■調査・研究の目的

福岡県内の大学において、研究活動を進めながら出産・育児というライフイベントを体験している女性研究者に質的な調査を行い、育児中の女性研究者たちを取り巻く現在の状況を明らかにする。そこで女性研究者たちが、研究活動と育児の両立—「研究者としてのキャリアを重ねること」と「母として子どもを育てること」の間で、具体的にどのような問題に直面しているかについて考察を行う。

■調査・研究の方法

(1) 調査の対象

調査対象：福岡県内において、小学生までの子どもを持ち、大学で仕事を行っている女性研究者

調査大学：北九州市2校、福岡市2校、田川市1校、大牟田市1校
合計6校

(2) 調査期間

2020年9月～11月

(3) 調査方法

インタビュー調査 10名（調査票1） 文書での調査 2名（調査票2）

調査人数 合計12名

10名にインタビューを行った。インタビューを行わなかった2名については電子メールにて文書での調査を行った。

(4) 調査内容

インタビューは、半構造化インタビューで、あらかじめ「研究について」、「生活について」、「仕事と育児の両立について」、「あなたご自身について」といった大まかな質問を用意し、それらについて自由に話してもらった。

■結果と考察

(1) アンケート調査の結果

「女性研究者の研究と育児の両立における実態調査」のアンケート結果から、女性研究者全員が、程度の差はあるものの「難しさ」を感じていることがわかった。

(2) 女性研究者の実態

① 研究について

- ・育児中の女性研究者は、自分の研究を行うための時間確保が難しい。
- ・子どもがいるという理由から、研究活動に何らかの制限をかけている女性研究

者が多い。

- ・研究を続けていくことに対する不安を感じる例があった。

② 生活について

- ・研究者としてキャリアを積み始める時期に結婚を決めるパターンと正規の職を得てから結婚を決めるパターンの2つのパターンが見られた。いずれにしても30代になってからの結婚が多かった。
- ・出産直前や出産直後も仕事をしている例が多かった。
- ・家事・育児におけるパートナーの分担については「十分ある」という回答が多かった。しかし、インタビューの結果からは、パートナーとの分担のあり方が、性別役割分担意識に引きずられている様子が推察された。
- ・育児を行う上で利用したサポートとしては、保育園や幼稚園、学童保育、ベビーシッター、実家の母親の援助などが見られた。
- ・非常勤講師の場合では、保育園やベビーシッターを利用することが難しい例も見られた。

③ 仕事と育児の両立

- ・仕事と育児の両立の上では、子どもの急な病気など、イレギュラーなことが起こった時の対応が難しい。
- ・コロナ禍での仕事は困難な面が多く聞かれたが、状況を前向きに捉える例も見られた。

④ 女性研究者の「ストレス度」と「幸福度」

女性研究者たちが、研究と育児の両立を目指す中で、「どういう気持ちで暮らしているのか」という気持ちのありように注目したいと考え、「今一番欲しいもの」、「ストレス度」と「幸福度」について質問を行った。

- ・「今一番欲しいもの」については「時間」という回答が多かった。
- ・「ストレス度」については非常にストレスを感じている者とさほど感じていない者に分かれた。
- ・ストレスを強く感じる理由については、なかなか研究が進まないことによる焦りや不安が関係していることがわかった。
- ・「幸福度」が高いことがわかった。

(3) 女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題

① 自分の「研究」を進めることができない葛藤

- ・正規の教員の場合、「教育」と「大学運営」の仕事に時間が割かれ、思うように研究を進めることができない。
- ・論文数が少ないと昇進が遅くなることもある。
- ・研究者人生を長いスパンで考えることによって、自分らしいワーク・ライフ・バランスを前向きに捉えられる。

② 非常勤講師の悩み

- ・非常勤講師の場合は、研究費を獲得するためのチャンスを得ることが難しい。そこに出産・育児が重なると、研究を継続させること自体も難しい。
- ・1年更新の不安定な立場で、先が見通せないために、自分の研究者人生を長いスパンで見ることが難しい。
- ・非常勤講師は、実働時間の関係で子どもを保育園に預けることができないという問題をはじめ、自分が「社会的に認められていないのではないか」という不安を抱いている。

③ 周囲のサポートと性別役割分担意識

- ・パートナーとの分担においては、性別役割分担意識のもと、同じ「稼ぎ手」であっても、女性が主体的に、「家事・育児役割」を引き受けている様子が一部でうかがえた。
- ・女性研究者が「主な稼ぎ手」となり、パートナーが「家事・育児役割」を行うという例がある。
- ・男性が育児休業を取得するなど、「男性が育児を優先させること」が現実的に難しい面もある。
- ・正規の大学教員の場合は、ベビーシッターの積極的な利用も見られた。
- ・「気軽にベビーシッターを雇える世の中になっていないと研究は続けられない」という指摘があった。

④ 理系の女性研究者の実態

- ・実験系の現場では、「長時間労働が当然」であるために、出産や育児などによって男性と同じように長時間労働ができない女性に対して、風当たりが強い一面がある。
- ・厳しい状況の中でも、大学の支援制度や上司や仲間の支えによって救われているという声があり、女性研究者同士の悩みを相談したり意見を交換することが重要であり、場合によっては、女性同士だけにとどまらず、男性も含めた環境で、女性研究者が抱える悩みや意見を共有していくことも必要である。
- ・研究と育児の両立のあり方は、人それぞれで、さまざまな形があっても良い。

■まとめ

- ・女性研究者は、研究と育児の両立において、大学およびアカデミックな世界の持つ仕組みがもたらす困難と、家庭や職場でのジェンダー問題に由来する困難という、二重の困難を抱えがちである。
- ・置かれている状況や立場に関わらず、「研究をしたい」と思っている育児中の女性研究者たちが、自分らしく研究と育児を両立し、理想的なワーク・ライフ・バランスを実現させるためには、柔軟に対応できる研究環境づくりが必要である。

■今後の課題と提言

(1) 大学内の子育てサポートの仕組み（施設・機会）づくり

- ・大学に支援制度があってもそれを受けるかどうか悩む例や支援制度自体を知らない例も見られるため、大学側が、女性研究者に対し、支援を受けやすくするよう

なソフト面でのサポートを行うことが必要である。

- ・ 大学に所属していない非常勤講師であるが、それでも大学教育にとって不可欠な存在であるという点から、大学において何らかのサポート策が検討されていくことを期待したい。

(2) 女性研究者同士のネットワークづくり

- ・ 育児中の女性研究者をめぐる環境がより良いものになっていくためには、女性研究者たちが、日々奮闘している姿をもっと世の中に提示していくことが必要である。
- ・ 正規の教員、非常勤講師に関係なく、さまざまな立場の女性研究者たちが、女性研究者特有の悩みを相談し合い、意見を共有する場が必要である。
- ・ 女性研究者同士で研究や育児のことを話し合えるネットワークづくりを目指していきたい。

第1章 調査・研究について

1 はじめに

(1) 研究背景と目的

大学をはじめとする教育の分野は男女平等が進んでいると思われがちであるが、実際は、4年制大学への進学率は、2019年の調査によると、男性56.6%、女性50.7%で、男性の進学率と女性の進学率の間には、少しばかりではあるが、差があることがわかる。そして、大学院への進学率に注目すると、いまだに女性の大学院進学率は、男性の半分以下に過ぎないのである¹⁾。また大学及び大学院の教員における女性の割合は、25.4%に留まっている。特に教授等²⁾に占める女性の割合は低く17.2%となっている³⁾。

日本における女性研究者の数も、他国に比べると少ない。2019年の調査によると、他国での研究者全体に占める女性研究者の割合は、英国では38.7%、アメリカ33.4%、韓国20.4%であるのに対し、日本の場合は16.6%であり、他国と比較すると低い水準であるのがわかる⁴⁾。また専門分野に注目すると、大学等においては、工学・理学分野における女性研究者が少ないこともわかった⁵⁾。

このように、日本においては、女性が研究職に就かない、あるいは研究を継続できない現実がある。その背景の1つには、女性研究者のワーク・ライフ・バランスの課題があるように思われる。例えば、女性が研究者を志す場合、仮に大学、大学院とストレートに進んだとしても、博士号取得は27歳、それからポストドク⁶⁾を経て、主に任期付きの助教や講師などの職を得ることができるのが30歳前後になる。そこからキャリアアップを進めていかなければならないという時期が、いわゆる結婚・出産適齢期と重なっていることで、女性研究者が結婚・出産の選択をする場合、それと研究を両立する上で複雑な課題を抱えやすく、中には、出産・育児のために、研究の継続を諦める女性研究者もいるのである。

文部科学省は、2006年度から2014年度まで「女性研究者研究活動支援事業」を実施し、大学や研究機関等に対し、重点的な支援を行ってきた。2015年度からは「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」を開始し、女性研究者の出産・育児・介護等のライフイベントやワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備、研究力向上のための取り組み、および女性の上位職への積極的な登用に向けた取り組みを行う大学や研究機関等への支援を行っている。

福岡県内の大学においても、例えば、九州大学や九州工業大学における男女共同参画推進室の設置など、女性研究者が研究活動と生活を両立するための研究環境の整備や研究支援の取り組みがなされている。

しかし、文部科学省による重点的な支援を受けることができているのは限られた大学であり、現実的には女性研究者支援のための組織も存在せず、支援のための機

1) 内閣府『男女共同参画白書 令和2年版』2020年、121頁

2) ここでいう「教授等」とは、学長、副学長及び教授の合計を指す。

3) 内閣府『男女共同参画白書 令和2年版』2020年、126頁

4) 同上、128頁

5) 同上、129頁

6) ポストドクターの略。博士号（ドクター）取得後に任期制の職に就いている研究者のこと。

関が設置されていない大学も少なくない。

このように女性研究者への支援が広まりつつある動きの中でも、どこに相談していいのかわからず、例えば、研究と育児における葛藤をひとりで抱え込み、悩んでいる女性研究者もいるように思われる。

そこで、筆者は、そういった「声なき声」も拾うべく、福岡県内の大学において研究活動を進めながら出産・育児というライフイベントを体験している女性研究者に対して聞き取り調査を行い、女性研究者たちが、研究活動と育児の両立－「研究者としてのキャリアを重ねること」と「母として子どもを育てること」の間で、具体的にどのような問題に直面しているのか、そしてそこから何が見えてくるのかについて明らかにしたいと考える。正規教員だけでなく、非常勤講師の声も集める点の特徴である。

正規教員という安定した立場と、非常勤講師という不安定な立場の両者の話を聞くことで、悩みや問題は同じであるのか、あるいは違いがあるのか、違いがあるとしたらどのような点なのかについても注目する。

このようにそれぞれの女性研究者たちが抱えている具体的な問題点を明らかにすることによって、女性研究者の理想的なワーク・ライフ・バランスを考えるきっかけを作ることが本研究の目的とする。

(2) 先行研究

女性研究者の研究と育児の両立の課題について取り上げた研究は今日までも多く進められてきた。古くは天野正子が「女性研究者の地位と役割構造」において女性研究者の実態を取り上げる中で、研究と育児の両立の難しさについて、「研究活動はその性質上、中断は許されず、集中性と持続性が要求され」るため、「研究活動は、家庭役割の『片手間性（パートタイムネス）』では成り立たない」ことを指摘している⁷⁾。近年では、篠原さやか「女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス」において、自然科学分野を中心とする女性研究者を取り巻く現状や女性研究者のキャリア形成、ワーク・ライフ・バランスの課題について概観する中で、聞き取り調査などを参考に、研究者の職務特性が育児中の研究者にとって課題になることや研究者には「研究活動に対する、物理的、精神的なコミットメントが必要とされるため、私生活との両立が困難であること」を指摘している⁸⁾。

筆者が今回取り組もうとしている、研究と育児の両立を含めた女性研究者の実態についての調査の先行例としては、早稲田大学女性研究者支援総合研究所が、若手研究者を対象に丁寧な聞き取りを行う中で、育児中の女性研究者の抱える困難や葛藤を浮き彫りにさせた『若手研究者の現状と支援ニーズ調査報告書』がある⁹⁾。

また同様な調査研究として波多野名奈による「研究と子育ての両立をめぐる葛藤－女性大学院生への聞き取り調査から－」があるが、そこで波多野は「研究者として身を立てることと、母としての役割を果たすということの狭間で揺れ動く女性たちの内面」を掘り下げることで、育児中の女性大学院生たちを取り巻く状況と研究

7) 天野正子「女性研究者の地位と役割構造」金城学院大学『金城学院大学論集』79号、1978年、15頁

8) 篠原さやか「女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス」労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』62号、2020年、15頁

9) 早稲田大学女性研究者支援総合研究所『研究者養成のための男女平等プランに関する調査（4）若手研究者の現状と支援ニーズ調査報告書』2007年

と育児の両立をめぐる葛藤の主要因についての分析に取り組んでいる¹⁰⁾。筆者もこれにならい、本調査では女性研究者たちの揺れ動く心情を汲み取ることで、研究と育児の両立をめぐるリアルな実態を浮き彫りにさせることを目指したいと考えた。

2 調査の方法

(1) 調査の対象

調査対象：福岡県内において、小学生までの子どもを持ち、大学で仕事を行っている女性研究者¹¹⁾

調査大学¹²⁾：北九州市2校、福岡市2校、田川市1校、大牟田市1校、
合計6校

調査対象者のプロフィールを表1にまとめた。調査対象者の研究分野は、文系9名、理系3名であった。職種¹³⁾については、教授2名、准教授8名、非常勤講師2名であった。そのうち労働形態が正規である者は9名、有期である者は1名、非正規である者は2名であった。年齢は、30代2名、40代9名、50代1名であった。

(2) 調査期間 2020年9月～11月

(3) 調査方法

インタビュー調査 10名（調査票1） 文書での調査 2名（調査票2）

調査人数 合計12名

10名にインタビューを行った（調査票1）。H氏、I氏は対象者の2名に対して同時にインタビューをする、グループインタビュー形式で行った。D氏、F氏のインタビューは、対象者と同じ大学の育児経験者である女性研究者1名が立ち会う形で行った。それ以外は、対象者と1対1で行った。対象者の了承を得てICレコーダーで録音した。

インタビューを行わなかった2名については電子メールにて文書での調査を行った（調査票2）。

(4) 調査内容

インタビューは、半構造化インタビュー¹⁴⁾で、あらかじめ「研究について」、「生活について」、「仕事と育児の両立について」、「あなたご自身について」といった大まかな質問を用意し、それらについて自由に話してもらった。

10) 波多野名奈「研究と子育ての両立をめぐる葛藤－女性大学院生への聞き取り調査から－」『日本教育学会大会研究発表要項』68巻、2009年

11) 本調査における「研究者」とは、専門知識を有し、特定のテーマを持って、大学で研究を行っている者を指す。大学における研究者としては、主に大学教員が挙げられるが、本調査においては、調査の性質上、非常勤講師も含めることにする。

12) ここで挙げている大学は正規の大学教員の所属先。非常勤講師の場合は複数の大学を掛け持ちであるため、ここには記載しない。

13) 大学教員の職種としては、教授、准教授、講師、助教、助手がある。本調査では、非常勤講師も含めることにする。

14) 構造化された質問と構造化されていない質問の混合で、聞きたいことをおおよそ整理しておくが、聞き方や聞く順番はインタビューの流れや状況に合わせて柔軟に変えていくインタビュー方法。

(5) 付記

調査対象者の発言については引用箇所を抜粋し、本人に発言内容を確認した上で引用についての承諾を得た。

表 1 調査対象者のプロフィール

	研究分野	インタビュー日時	職種	労働形態	年齢	通勤時間	パートナー	パートナーとの同居	小学生までの子ども
A氏	文系	2020. 9. 9	非常勤講師	非正規	30代	回答なし ¹⁵⁾	会社員(正規)	別居	1人(2歳)
B氏	文系	—	准教授	正規	40代	15分	研究者(正規)	別居	1人(6歳)
C氏	文系	—	准教授	正規	40代	1時間40分	パート(非正規)	同居	2人(9歳、6歳)
D氏	理系	2020. 9.26	准教授	正規	50代	1～1時間半	大学教員(正規)	同居	1人(12歳)
E氏	文系	2020. 9.30	教授	正規	40代	15分	公務員(正規)	同居	1人(10歳)
F氏	文系	2020.10. 2	教授	正規	40代	1時間40分	会社員(正規)	別居	1人(9歳)
G氏	理系	2020.10. 5	准教授	正規	40代	5分	会社員(正規)	同居	2人(3歳、1歳)
H氏	文系	2020.10. 6	准教授	正規	40代	30分	なし	なし	1人(11歳)
I氏	文系	2020.10. 6	准教授	正規	40代	2時間	会社員(非正規)	同居	2人(10歳、5歳)
J氏	理系	2020.10. 9	准教授・研究員	有期	40代	20分	公務員(正規)	同居	2人(10歳、8歳) ¹⁶⁾
K氏	文系	2020.11. 2	非常勤講師	非正規	30代	1時間半	会社員(正規)	同居	1人(1歳)
L氏	文系	2020.11. 9	准教授	正規	40代	40分	大学教員(正規)	同居	1人(4歳)

15) 非常勤講師で複数の大学に通勤しているため、通勤時間については、回答なしとした。

16) J氏には小学生までの子ども(10歳、8歳)の他に14歳の子どもがいる。

3 アンケート調査の結果

(1) アンケート調査の実施

本調査では、女性研究者に対し、まず育児中の女性研究者の実態を大まかに把握するために、5項目のアンケート調査を行い、12名中12名の回答を得た。

項目内容は、以下のとおりである¹⁷⁾。

- ① 今現在、研究と育児の両立の難しさを感じるか
- ② 研究を続けていくことへの将来の不安について
- ③ 家事・育児についてのパートナーの分担について
- ④ 子どもが乳幼児の時、研究はどの程度行うことができたか
- ⑤ 子どもが乳幼児の時、育児はどの程度行うことができたか

(2) 質問内容と回答

- ① 「今現在、研究と育児の両立の難しさを感じますか」という質問を行った。この質問に対し、「とても感じる」と回答した者は3名、「ある程度感じる」と回答した者が9名で、「あまり感じない」「感じない」はそれぞれ0名であった。

とても感じる	3名	25%
ある程度感じる	9名	75%
あまり感じない	0名	0%
感じない	0名	0%

- ② 研究と育児を両立する上で「研究を続けていくことに将来の不安はありますか」という質問に対し、「とても感じる」と回答した者は3名、「ある程度感じる」と回答した者は2名、「あまり感じない」と回答した者は6名、「感じない」が1名だった。

とても感じる	3名	25%
ある程度感じる	2名	16.7%
あまり感じない	6名	50%
感じない	1名	8.3%

- ③ 「家事・育児についてのパートナーの分担はありますか」という質問を行った。質問に対し、「十分ある」と回答した者が7名、「ある程度ある」が3名、「あまりない」が1名、無回答が1名であった。

十分ある	7名	58.3%
ある程度ある	3名	25%
あまりない	1名	8.3%
全くない	0名	0%
無回答	1名	8.3%

17) 本書では、構成上、質問内容の順番を調査票のものと一部入れ替えている。

- ④ 「子どもが乳幼児の時、ご自身の研究はどの程度行えている（いた）と思いますか」という質問を行った。この質問に対し、「ある程度行えている（いた）」と答えた者が3名、「あまり行えていない（いなかった）」と答えた者が9名、「全く行えていない（いなかった）」が1名であった。（※複数回答があったために回答数が合計13となっている）

十分に行えている（いた）	0名	0%
ある程度行えている（いた）	3名	23%
あまり行えていない（いなかった）	9名	69%
全く行えていない（いなかった）	1名	8%

- ⑤ 「子どもが乳幼児の時、育児はどの程度行えている（いた）と思いますか」の質問には、「ある程度行えている（いた）」という回答が12名であった。

十分に行えている（いた）	0名	0%
ある程度行えている（いた）	12名	100%
あまり行えていない（いなかった）	0名	0%
全く行えていない（いなかった）	0名	0%

(3) 調査結果

調査結果から見てきた育児中の女性研究者の実態は、以下のとおりである。

- ① 「今現在、研究と育児の両立の難しさを感じるか」という質問に対し、今回調査に協力いただいた女性研究者全員が、程度の差はあるものの、難しさを感じていることがわかった。
- ② 「研究を続けていくことへの将来の不安について」は、「感じる」よりも「感じない」という回答が多かった。
- ③ 「家事・育児についてのパートナーの分担について」は、「ある」（「十分ある」、「ある程度ある」）という回答が約8割を占めており、十分な分担があるということがわかった。
- ④ 「子どもが乳幼児の時、研究はどの程度行うことができたか」については、「行えていない」（「あまり行えていない（いなかった）」、「全く行えていない（いなかった）」）という回答が多く、子どもが乳幼児の時は思うように研究を進めることができない、できなかったと感じる女性研究者が多かった。
- ⑤ 「子どもが乳幼児の時、育児はどの程度行うことができたか」については、全員が「ある程度行えている（いた）」を選んでいることから、子どもが乳幼児の時は、育児に力を注いでいたことがわかった。

以上のアンケート調査結果を踏まえた上で、本研究の要である聞き取り調査を行った。

第2章 聞き取り調査結果

聞き取り調査では、アンケート調査の結果から得られた「女性研究者が研究と育児を両立させる上で難しさを感じている」ということを前提とし、なぜ両立が難しいのか、その要因を探ることを一つの課題とした。

そこで本章では、女性研究者たちが、どのように研究に取り組んでいるのか、研究を進める上でどのような不安があるのか（1 研究について）、どのようなタイミングで結婚・出産を行ったのか、家事・育児についてパートナーの分担があるか、育児を行う上でのサポートを受けられているか（2 生活について）、仕事をする上で具体的にどのような点に難しさを感じるか、コロナ禍での様子（3 仕事と育児の両立）、幸福度とストレス度（4 今のあなたご自身について）など聞き取りを行った中から、主要な「語り」を取り上げ、具体的な内容から、女性研究者の実態について明らかにすることを目指した。

1 研究について

(1) 研究と教育

大学は、「教育・研究」を行う場であり、大学教員は、学生に授業を行うだけでなく自分の研究を深め、その成果を広く社会に提供する必要がある。また、正規の教員の場合は、これに加えて、「大学運営」のための業務もある。聞き取り調査において、女性研究者たちに「教育」と「研究」に割く時間について聞いたところ、「教育」も「研究」もほぼバランスよく行うことができているという例も見られた（G氏）が、それらと育児を両立させる上では、自分の研究の時間を減らしている例（H氏）をはじめ、自分の研究の時間を確保することが難しい状況がわかった。このことについては第3章にて詳しく分析を行う。

G氏：9時～5時まで大学に居られる。そのうち、今は、6割が教育で4割が研究ですかね。現在、コロナの影響もあって、オンライン授業の準備もあるのでそのへんで負荷がかかって教育の割合が多いんですけど、たぶんそうじゃなければ研究の方がちょっと多いと思います。（准教授、理系、40代）

H氏：子どもが生まれる前と比べると、研究の時間を減らしています。（准教授、文系、40代）

K氏：今は毎日授業に行っている。それと育児とを並行するのだったら、自分の研究の時間を見つけるのは難しい部分もある。（非常勤講師、文系、30代）

(2) 研究において制限していること

今回話を聞いた女性研究者の多くが、子どもがいるという理由から、研究活動に何らかの形で制限をかけていることがわかった。特に、国内外の学会に行くことを諦めている、学会に行く回数を減らしているといったような声が多く聞かれた（D氏、G氏、L氏）。その他としては、研究を行うには時間だけでなく気力も必要で

あるが、育児のために、研究に向ける気力をセーブしているという声もあった（A氏）。同様に、母親としての役割を優先させるために研究時間をセーブしているという声もあった（F氏）。

D氏：一番変わったのは、出張に行けなくなりました。遠くの学会発表。また、(学会が)福岡であると昼間参加できるのですけれど、夜の懇親会には出られません。(准教授、理系、50代)

G氏：学会の回数はやっぱり諦めてはいる。セーブはしてる。(准教授、理系、40代)

L氏：学会なんかはあまり行けなくなっている。本当ならコンスタントに学会に行って知見を得たり、ディスカッションしたり、それなりに自分の役割を学会の中で作っていかなければならない。それまでは学会発表していたのに、今は発表もしないから、引いた感じになっているし、出産前はアウトリーチで学外に研究で行っていたけど、出産を機にお休みさせていただいて、そのままになっている研究もある。そういった意味では、出産していなければ、そのまま、研究の場としてそこに行き続けていた可能性もあるだろうし。学会もそうだし、前みたいに夜大学に残ることもできなくなったし、土日は子どもの世話もあるし、そういった意味では諦めるというより削られていることはある。(准教授、文系、40代)

A氏：前に比べると、無理ができなくなった。例えば、昔だったら、自分が仕上げたい研究成果がある場合に、睡眠時間をどれだけでも削ったのに、2時間は寝ないといけないとか、余力を子どもに残さないといけない。だから諦めていることは、全力以上の力を出すこと。(非常勤講師、文系、30代)

F氏：今は、子どもをちゃんと育てることも私の仕事のうちの1つなので、後悔のないように、育児はちゃんとやっている。そこは手を抜かないように。母親は私1人しかいないので。私の場合は、その分、研究時間にしわ寄せがいつている感じですかね。(教授、文系、40代)

(3) 研究を続けていく上での不安

研究を続けていく上での不安があるかについて質問を行った。研究を続けていく上での不安については、アンケート調査における「研究を続けていくことに将来の不安はありますか」という質問に対し「あまり感じない」という答えが一番多かったことは先に述べたが、「あまり感じない」「感じない」という回答を選んだのはすべて正規の教員だった。しかし、「とても感じる」という回答にも注目してみると「とても感じる」という回答をした3名のうち、2名が非常勤講師と任期付きの研究者だった。

具体的に見てみると、研究を続けていく上での不安については、正規の教員の場合では、研究費を獲得できるかについての不安（D氏）、育児との両立の上で研究を思うように進められないための焦りからくる不安（F氏）などが見られたが、例

えば、非常勤講師の場合では、契約が1年更新であるため、来年も仕事を続けることができるかどうかに対する不安（K氏）といったような「研究に携わること」そのものを続けていくことができるかどうかの不安を抱えていることが明らかになった。

正規の教員と非常勤講師では、不安を抱くのは同じでも、研究を続けていく上での不安の内容が異なっていることがわかった。

D氏：私の場合、プロジェクトが今年度で終わるので、変な話、来年度の研究費がゼロかもしれない。そしたら続けたいとはいうものの、研究費ゼロだったら、実験系とか、ほぼできない。となると、不安は不安ですね。そういう意味で不安。（准教授、理系、50代）

F氏：私は、今（育児との両立もあって）すごくゆっくりしたペースでやっているのですが、同じような年齢だったり同じジャンルの人でもスーパースターみたいな人いますよね。そういう人たちって学会にもしょっちゅう出てくるし、その人たちと同じような研究をやっていると、私がやっても、差があまりに大きすぎて、やっていいのかな？みたいな。でも、やるしかないんですけど。そういう意味での不安ですね。（教授、文系、40代）

K氏：産休をとっている間、すごく不安だった。常勤じゃないから、1年契約で、「来年からまた勤めたいです」って言うのは言えるけど、確約はもらえないでしょう。すごく不安だった。本当につらかった。（非常勤講師、文系、30代）

2 生活について

(1) 結婚について

結婚の時期については、研究者としてキャリアを積み始める時期に結婚を決めるパターンと正規の職を得てから結婚を決めるパターンの2つのパターンが見られた。いずれにしても30代になってからの結婚が多かった。

早めに結婚して出産を選択すると育児のために時間が割かれ、業績を積むことができないので、キャリアアップしていくのが遅くなる。キャリアを積んでから結婚・出産の選択をすると、高齢出産になる。このように女性研究者は、キャリア形成の上で難しい選択にさらされる面もある。

J氏：27歳で結婚した。（博士後期課程を）卒業するくらいになって、どうするってなって結婚したんですけど、もともと子どもが欲しかったから結婚したんですよ。「女なのにそんな高学歴になってどうすると？」なんて言われていた世代だったから、「全部取ってやる！」と思って。（准教授・研究員、理系、40代）

A氏：（結婚したのは）34歳。その時、非常勤で1コマ¹⁸⁾。やっと始まったっていう

18) コマは時限の単位のこと。大学の授業は基本的にコマ90分で、学部の場合は1日に1時限目から5時限目までである。

時。(非常勤講師、文系、30代)

K氏：大学に所属して研究しながら非常勤をしている時に結婚した。(非常勤講師、文系、30代)

F氏：私は1個ずつ片付けていかないと。(略) 学位が取れて1つ片付いたので、結婚かなと。32歳で結婚して、33歳で(就職が)決まったんだっただけ。(教授、文系、40代)

E氏：いわゆる自立が確立された後での結婚だから、ラッキーだったんですよ。順序はうまくいっています。結婚生活と仕事生活。向こうも、仕事のある人と結婚するつもりで結婚した。自立が決まった後の結婚は、重要なファクターですよ。でも大学の研究職・教員職というのは、30代半ばの、出産とかが危ぶまれる時期だから、本人だけの問題じゃないんですよ。(教授、文系、40代)

G氏：結婚する直前に准教授に上がりました。周りの女性研究者だと、早めに結婚して早めに子ども産む人がどうしても助教で足踏みしちゃう。なかなか子育てもあって業績もたまっていかないし。だから准教授に昇進するのが遅いと思う。逆に私とかだと、先にキャリアを進めてから結婚すると、子ども産むのは遅くなるんですけど、キャリアはそんなに落ちずに進んでいく。(准教授、理系、40代)

(2) 出産・育児について

出産直前や出産直後も仕事をしている女性研究者が多かった。ぎりぎりまで働き産休・育休を取得するケース(F氏)、中には出産当日の朝まで論文を書いたり(G氏)、出産直後にもゼミを開講する例(E氏)も見られた。大学における「教育」の仕事は専門性が高く、特にゼミや学生の論文指導では、継続的な教育が必要であるなど、大学教員には、「代わりがきかない」面がある。E氏の「女性教員は頼りにならない」と思われることのないように無理をしてしまったという「語り」も見逃せない。

そのほか、学会復帰のために育休からの復帰を早める例もあった(D氏)。このように、大学や学問の世界において、女性研究者が仕事の責任を果たすためには、妊娠時や産休・育休中にも十分に「休む」ことができない状況もあることがわかった。それは理系の女性研究者に多かった。そういった点も含め理系の女性研究者の実態については第3章に取り上げる。

一方、非常勤講師の場合は、産休や育休もなく、出産・育児をすることによってK氏やA氏のように、「仕事がなくなるかもしれない」という不安を抱き、そのために無理して復帰を早める例も見られた。

F氏：子どもが4月生まれだからちょうど2月の末か3月頭まで結構ぎりぎりまで働いて。授業もなかったから良かったんですけど。タイミングは良かったので、4月からの1年間休ませてもらったみたいな、ラッキーでした。保育園も一番近いところに決まったし。(教授、文系、40代)

D氏：産休入って育休をいただいて……。育休を取っていたんですけど、子どもが1歳になる直前に学会があって、それまでにできれば復帰するように求められていました。人手が必要でしたので、私自身もとにかく復帰しなくては、という思いでした。(准教授、理系、50代)

G氏：結構ぎりぎりまで仕事した。体調も安定していて、悪阻も^{つわり}ほぼなかった。直前まで仕事をしていて、出産する日の朝まで論文書いていた。上司から原稿が送られてきて、陣痛の合間に書いていた。(准教授、理系、40代)

E氏：(育休中のゼミ指導について) 出産があるから手放して他の先生に渡して、また戻るとかなるのは、学生の記憶の中で、言葉の中で、受け継がれて、女性教員は頼りにならない、なんていう歴史になると思ったんですね。だから無理しちゃった。だけどそれ違うんじゃないかなあって思って。(教授、文系、40代)

K氏：赤ちゃんができたのは喜ばしいことなのに、それで仕事なくなるかもしれない、お腹が大きい状態で複数の大学に行っていたから、1校1校、こういう事情で、休まなければならないんですけどっていうのと言わなくちゃいけない。でも妊娠した時に誰に言って、どういうふうな手続きを取ればいいのかっていうのがわからないから、体のことも心配しながら、複数の大学に事情を説明して回るのは、移動距離も含めて大変だった。仕事の迷惑をかけるから「本当にすみません」って謝りながら。でも「来年からもまた続けたいです」とも言いながら。(非常勤講師、文系、30代)

A氏：出産して3カ月後に復帰した。なんでかという、そうしなければコマがなくなる恐れがあったから。だけど体調が悪く、悪露^{おろ}が復活したりして、(病院で) 疲れですねって言われた。(非常勤講師、文系、30代)

(3) 家事・育児におけるパートナーの分担について

アンケートにおける「家事・育児についてのパートナーの分担はありますか」という質問に「ある」「十分ある」「ある程度ある」という回答が多かったことは先にも述べたが、インタビューにおいても、パートナーの協力が十分にあるという話が多く聞かれた。そして、パートナーの十分な協力・分担に対して感謝する声も多かった。ただしその一方で、あまり分担を得られていない回答も見られた。

F氏：夫はもともと亭主関白でもなんでもないので、家事はやれる人がやるっていうタイプの人。私が「授業だから休めない」と言ったら、夫が「すみません今日は……」って会社に電話したりとか。夫が、「出張先に子どもを連れてって仕事できるかな」って考えたりとかという感じです。(夫は) なんでもやります。遅くなるって言ったらご飯も作ってくれるし。別にご飯を作るのが好きなわけじゃないけど、やんなきゃいけないならやる。(略) 掃除もやるとか、体は動くし、変なプライドもないし。(教授、文系、40代)

A氏：本当に、対等くらい。例えば、どうしても授業の準備が終わらない時に、向こ

うが寝かしつけまでしてくれたりとか。私が朝起きられない時に子どもの朝ごはんの準備をしてくれたりとか。すごく感謝ですね。(非常勤講師、文系、30代)

L氏：できる方がやる。主人も効率よく回るように協力してくれる。朝ごはんを作るのは主人で、その間私は洗濯をしたり子どものことをしたりして、主人は早く家を出る。夜ご飯は私の方が帰りが早いので、ご飯作って、その間に主人が洗濯物畳んでる。本当にそういう家事を主人は嫌がらない。保育園のお母さんたちと話をすると、その時にうちの主人はそんなにしてくれるんだと思ってありがたみを感じる。やっぱり、ありがたいと感謝しないといけないですね。(准教授、文系、40代)

G氏：うちの場合は分担です。朝ごはん、お弁当、洗濯物も畳んである。ゴミ捨ても、子どもたちのお風呂も夫。寝かしつけも。ほぼです。(略) インタビューしてもらって口に出してみても、ほぼやってもらっていることに気づく。ありがたいですね。(准教授、理系、40代)

E氏：旦那さんに「子どもをみていて」と言ったら、気楽に「俺みとくよ」って言って何にもしないって言う(笑)。女性が言う“みる”はWatchじゃなくてCareなのに。(教授、文系、40代)

K氏：難しい。だって子育てって、パートナーいるけど、女性の方が負担が多い。結局、ママに来るし。物理的に抱っこしている時間がママの方が多いし。だからそれも子どもが世界で唯一私に信頼を置いてくれているということでもあるから、今までに感じたことのない充実なんだけど、それを背負っていく上では、そんなに手伝ってくれるパートナーは……いると思うけど、私の旦那さんは残念ながらそうじゃないから(笑)。最初から、掃除と炊事は女の仕事って考え方で。でも今の時代そうとは限らないじゃない？私の仕事も最初はすごく認めてくれていたんだけど、触れたことのない世界だから理解がなくて。(非常勤講師、文系、30代)

以上、家事・育児についてパートナーの分担が十分に見られる例が多かったが、一方で、パートナーとの分担のあり方が、意識的に、あるいは無意識のうちに、性別役割分担意識に引きずられている様子が推察された。それについては、第3章で、具体的な「語り」を詳しく取り上げ、考察を行うことにする。

(4) その他のサポート

育児を行う上で利用したサポートとしては、保育園や幼稚園、学童保育などが挙げられた。就学前については、正規の教員のほとんどが保育園を利用していた。しかし非常勤講師では、保育園を利用することができなかった例もあった。

その他のサポートとしては、実家の母親の援助という回答が多かった。普段から母親が積極的にサポートをしてくれる例もあるが、「どうしても」という場合に母親の助けを借りる例もあった。いずれにしても、A氏の「手伝ってもらう存在は必ず要る」という言葉のように、女性研究者は、育児を行う上で、何かしらのサポー

トを必要としていることがわかる。

なお、今回は取り上げないが、女性研究者の場合、比較的高齢で出産するために、育児と親の介護が同時期に発生するダブルケア問題を抱えてしまうケースがあることを挙げておく。その場合は、「研究と育児」だけでなく、「研究と介護」あるいは「研究と育児と介護」の両立も課題になってくるだろう。

また、正規の教員の場合は、ベビーシッターの利用も見られた。どういう場合にどのようにして利用しているかといったことを含め、ベビーシッターの利用については、第3章で触れている。

<保育園について>

H氏：保育園に6時まで、延長したら7時まで。それより遅く会議がある時はベビーシッターさんに頼んでいました。(准教授、文系、40代)

E氏：研究職にある女性に対するサポートは実際ないですよ。最近、在宅勤務の女性に対するサポートはありますよね。在勤でどれだけ時間を使ってるかっていう証明ができればいいんですよ。でも、研究者って、何時間使ってるかっていうのが、なかなかね。保育園に入れるってなるとそっちの理解はないでしょうねえ。(教授、文系、40代)

A氏：保育園考えた考えた。でも点数が足りない。非正規で、「これだけしか(時間的に)縛られないでしょ」っていうのがあったので、私はさらに、時間外労働を踏まえたシフト表を作った。月から土まで時間を書いて、ここからここ、何時から何時、時間外労働がいる。で、計8時間以上毎日仕事しないといけないって書いたけど、認められなかった。(略)おそらく非正規の女性がぶち当たる壁は、保育園問題。認可外の保育園だったら受け入れがあるけど、バカ高い。非常勤だからそんなに稼いでないのに。今幼稚園で2歳児は3歳の誕生日にならないと無償化の対象じゃないんだけど、認可外の保育園よりは、金銭的に抑えられるし、幼稚園の機能があるので、教育もきちんとしてくれて、制服だから洋服も心配しなくて、給食も出るから、結果は、幼稚園の2歳児保育の方に私は入れてよかったと思う。(非常勤講師、文系、30代)

<実家のサポート>

F氏：母には、夫がいない時に頼ります。私が用事があるときに、夫がいない、そんな時「ちょっと見てて」とかそんな感じ。子どもが小学生になってからは、「母の家に帰っておきなさい」って言って、そして私の仕事が終わったら、母の家に迎えに行くこともある。母も「週に1回くらい孫が来るのは気分転換になっていい」って見てくれるんですけど。(教授、文系、40代)

K氏：お母さんが協力的で、コロナの影響で、保育園に預けられなかった時も見えてくれて。お母さんがいなかったら鬱になっていたと思う。(非常勤講師、文系、30代)

G氏：私ちょっと変わってるんですけど、金曜日から実家に帰る。金曜日に子ども

の幼稚園が終わると、幼稚園が2時までなので、お預かりを利用せずに、そこから実家に移動して、日曜日の夕方まで実家の両親に子どもたちを見てもらいながら、私は仕事部屋にこもって仕事をする。(准教授、理系、30代)

A氏：頑張って研究して、教育機関に勤めてるわけだから、授業もあるし、準備もある。そんなに全てをする時間ないから、例えば全てをするんだったらパートナー以外のサポート、例えば、行政機関のサポートを使ったり民間のお手伝いさんを雇ったり、お金で解決できる部分とかもある。でも私の場合は、夫の収入がとて多いってわけでもないから、お手伝いさんは難しいってなる。それだったら空いてる方が家事をして、どうしてもお互い仕事で無理な時は、もしくは家の中でもリモートしなきゃならないって時は、実家の母に手伝ってもらった。手伝ってもらう存在は必ず要る。(非常勤講師、文系、30代)

3 仕事と育児の両立

(1) 仕事と育児の両立の難しさ

女性研究者の「語り」の中では、研究だけでなく大学の仕事と育児の両立について「難しい」とはっきり言葉にする例も聞かれた。その中で、特に大学教員でもある女性研究者が仕事を進めていく中で難しさを感じるのは、「子どもが急に病気になった場合」であった。

G氏：子どもの病気、イレギュラーな事が起こった時の仕事の調整。うちの子たちは、本当によく風邪をひく。幼稚園や保育園に行っているのもあると思うが、まだ振り回されている。(准教授、理系、40代)

「子どもが急に病気になった場合」の対応で悩むのは、育児をしながら仕事をしている者にとってはよくある話であるが、大学教員の場合、当日に授業を休講にすることは、多くの学生に影響を与えることになるため対応に難しい面がある。また、その他には入試関係の業務も代替が利かないため、急な事態が起きた場合はパートナーに休みを取ってもらったり、実家の家族に頼るなどしなければならない例が見られた。パートナーと別居していたり、実家が遠いといった事情を抱える教員は、より難しい状況であることがわかる。

しかし難しい状況の時に、周囲の人の優しさ・サポートに心が救われた例(A氏)の他、「学生や他の先生に迷惑がかからないようにする工夫」を心がけた例(L氏)など、女性研究者の「語り」からは、難しい状況を自身の糧にしていこうとする様子も見受けられた。

A氏：1回、娘が高熱を出した時があって、どうしようってなったら、そこの常勤の女の先生が、「今空きコマだから何かあったら代理でしてあげるから帰っていいよ」って言ってくれた。その先生も昔非常勤で子育て経験者で、その当時の大変さを知ってる、そういう先生が専任でいてくださると随分違うというのがわかった。(非常勤講師、文系、30代)

L氏：1限目の授業の時、子どもが熱を出して急きょお休みにしたけど、遠方から来る学生もいて。早めに大学には連絡したけど、大学から学生への連絡が時間がかかるので、もう大学に来ていた学生が何人かいたみたいで、そのことへの不満を言われたことがあった。学生に申し訳なく、あの時が一番しんどかった。もちろん次の授業で謝ったけど、そこからできることとして、翌年度から小さい子どもがいるから急きょ休講にする場合もあるから、そのときは了承願いたいと最初に伝えた。(略)落ちこむだけでなく、何かしら学生や他の先生に迷惑がかからないようにする工夫は考える。(准教授、文系、40代)

(2) コロナ禍での様子

仕事と育児の両立の難しさについての話題の中で、現実的に、新型コロナウイルス感染拡大が仕事や研究活動に影響を与えているという話が多く聞かれた。緊急事態宣言が出されたことで、自身の仕事はオンラインになったが、保育園の登園も自粛となったため、育児中の大学教員は、家の中で仕事と育児を両立させなければならない状況となった。慣れない形での授業の準備に時間がかかるといったことや子どもが邪魔に入ってしまう悩みなど、困難な面が多く聞かれたが、子どもとの時間が増えて嬉しかったという本音や、仕事の家でもできることが証明された、といったような前向きな気持ちも聞くことができた。

コロナ禍での大学におけるオンラインを取り入れた新しい働き方は、不安や不便もある一方で、大学教員が、仕事と育児をどのように両立させていくかについての新たな可能性を示唆している。

K氏：前期は、コロナで保育園からも「預けないでください」という通知がきて日中は子どもの面倒見て、寝てから夜中に授業の準備、オンデマンド型のコンテンツを作って。前日の夜中に上げるという感じで、本当に2時間から4時間しか寝てなかった。(非常勤講師、文系、30代)

F氏：(遠隔授業の準備は)作業なんですよ。勉強とか研究じゃなくて。出来上がったものを入力していくとか。そういう頭を使わないようなことで、でも時間がすごくかかる。成績をつけ終わったと思ったら後期。何か研究をやらないと。結果を出さないといけないから。(教授、文系、40代)

G氏：今現在、コロナの影響もあって、オンライン授業の準備もあるのでそのへんで負荷がかかっています。オンライン授業で助かる面もあるんですけど、やっぱり今のところその対応に時間を取られている。(准教授、理系、40代)

L氏：緊急事態宣言中は保育園に行かせられなかったもので、子どもが、家でZoomで授業しているところに入り込んだり、録音しているところに入り込んだり。何度も学生に謝りながら、「これも4歳の子どもを持つ母親として理解してね」と説明したりした。(准教授、文系、40代)

A氏：ある意味リモートで助かっている。でもそのかわり家で絶対仕事しないといけないから、子どもが邪魔に入ると困る。今までは講師室とかである程度や

れる分はやっとう、ってできたのが、それができなくて、自宅が1LDKだったから、逃げ場所がない。だから3LDKにして、独立できる部屋にした。
(非常勤講師、文系、30代)

D氏：コロナ禍で、こういうことを言ったらよくないかとは思いますが、在宅勤務の期間がなかったら子どもとどうなっていたかなというくらい、これまで子どもと接する時間が本当になかったんですね。口を開けば「宿題をきなさい」とか「お風呂に入りなさい」とか「片付けなさい」とかそんなことしか言ってなくて。コロナの影響によって在宅勤務になって、夕方子どもが帰ったときに、「おかえりー」って、ご飯も一緒に食べてっていうのが増えてですね。そうすると子どもが、何気ない話を色々してくるんですね。何気ない話の中に、いろんなことが見えてくるというのがあって。だから、時間というのがやっぱり必要だったのかなとは思っています。(准教授、理系、50代)

4 今のあなたご自身について

聞き取り調査を進める中で、女性研究者たちが、研究と育児の両立を目指す中で、「どういう気持ちで暮らしているのか」という気持ちのありように注目したいと考え、「今一番欲しいもの」、「ストレス度」と「幸福度」について質問を行った。回答の結果は表2にまとめている。

表2 調査対象者のストレス度、幸福度、今一番欲しいもの

	研究分野	職種	労働形態	パートナーとの同居	ストレス度	幸福度	今一番欲しいもの
A氏	文系	非常勤講師	非正規	別居	10点	10点	時間
D氏	理系	准教授	正規	同居	10点	8点	時間と成果
E氏	文系	教授	正規	同居	1点	9点	時間
F氏	文系	教授	正規	別居	8点	9点	パートナーとの同居
G氏	理系	准教授	正規	同居	2点	8点	アップルウォッチ
H氏	文系	准教授	正規	なし	3点	8点	趣味のための時間
I氏	文系	准教授	正規	同居	2～3点	8～9点	時間
J氏	理系	准教授・ 研究員	有期	同居	8点	8点	休息
K氏	文系	非常勤講師	非正規	同居	10点	10点	安心して仕事と育児を 両立していける環境
L氏	文系	准教授	正規	同居	7点	9～10点	親に行き来してもらえる 環境

(1) 今一番欲しいもの

「今一番欲しいものは何ですか」という問いに対し、「時間」と答える者が多かった。ここから、女性研究者が研究と育児の両立を目指す上では「時間」が足りないということが読み取れる。「研究のための時間」や「育児のための時間」だけでなく、「自分自身だけの時間」や「趣味のための時間」が欲しいという声もあった（A氏、H氏）。

A氏：時間。育児のための時間も研究のための時間もどっちも欲しいけど、一番欲しいのは、ほーっとできる時間。自分自身だけの時間。自分だけになったら、あ、あの授業準備したいとか、あの本のこと調べたいとか、それはするんだけど、それプラスで、コーヒー飲んで好きな音楽聴いてだらーっとする、みたいな。そういう時間を後回しにしているうちに、娘が帰ってくるから。

H氏：趣味のための時間。

その他には、パートナーと別居しているために、「パートナーとの同居」を欲しいものとして挙げる回答（F氏）、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、離れて暮らす親に孫の成長を見せられないために、「親に行き来してもらえる環境」が欲しいという回答（L氏）もあった。

F氏：時間も欲しいんですけど、今はパートナーが近くに住んでいたらいいなと思う。

L氏：親に行き来してもらえる環境。コロナのせいで、孫の成長も近くで見せられていない。

(2) ストレス度

「今の生活を送る上でのストレス度について教えてください」（※ストレスを「とても感じる」を10点、「全く感じない」を0点）

上記質問については、10点をはじめとする高い点を回答する者と1点～3点といった低い点を回答する者、おおよそ2パターンに分けることができた。（10名中、8点以上5名、1点～3点4名、7点1名）研究と育児を両立させる上で非常にストレスを感じている者とさほどストレスを感じていない者に分かれるということである。

ここではストレスを感じるとした者の「語り」に注目する。ストレスを感じるとした者は、ストレスの度合いやストレスを感じる理由について、以下のように語っている。

A氏：ストレスは満点。ストレスがない人は毎日をどう送っていけばいいのか解決法を教えてほしい。（10点）

K氏：研究しなければ、というのが頭の中に常にある。（10点）

D氏：結果を出さなければというプレッシャーがあるため。(10点)

F氏：常に何かに追われている感じ。(8点)

J氏：やらないといけないという義務感と、将来をどうしようっていう焦燥感。
(8点)

「研究しなければ、というのが頭の中に常にある」や「結果を出さなければというプレッシャー」や「常に何かに追われている」という言葉からもうかがえるように、研究の世界では、成果を出すことによって業績を積み重ねれば、キャリアアップをしていくことも、研究を続けていくこともできない。しかし育児と両立させていく上では、なかなか研究が進まない場合が多く、その焦りや不安からストレスを抱えていると言えるだろう。

しかし、ストレス度が高いと言っても、不幸なわけではない。女性研究者たちの幸福度は高い。

(3) 幸福度

「今の生活を送る上での幸福度について教えてください。」(※「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点)

上記質問について、10名中10名が8点以上の回答だった。10名の平均点を出すと、8.8点であった¹⁹⁾。福岡県の令和2年度「県民意識調査」によると、福岡県民の「幸福実感」²⁰⁾は平均6.69点であるため、今回の調査を行った中で女性研究者の幸福度は県民の平均よりも高いということがわかる²¹⁾。

女性研究者の「語り」から、どういったことに幸せを感じているのかについて取り上げる。

J氏：好きなことができているから。(8点)

A氏：やりたいことを続けられているし家族の愛情も感じられるし10点かな。矛盾かな、ストレスも10点あるけど不幸かというとは違うというか、不幸にならないように今頑張っているし、やっていると思う。不幸にならないように日々考えてやっている。ここを強調したい。(10点)

A氏：研究者として活動し、研究業績を残すことで、自分が、その時その時で懸命に取り組もうとしていたことがわかるし、子どもが大きくなった時にお母さんがこの時こんなことを考えていたんだということを伝えられることが嬉しい。(10点)

19) 8～9点という含みを持った回答は8.5点、同様に9～10点という回答は9.5点にして算出した。

20) 幸福度と同意。福岡県民の幸福実感調査についても「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点で点数付けしている。

21) 福岡県『令和2年度県民意識調査報告書』2020年、6頁

L氏：仕事が向いているかは別として、仕事にやりがいがあって、子育てもできていて。子どもがいない生活は考えられない。子どもにもZoomで仕事をしている姿を見せることができている。見てくれているから、自分も誇りを持たないと。そういう意味で、大変な時もあるけど、幸せかなと思う。(9~10点)

「好きなことができている」「やりたいことを続けられている」という言葉にあるように、研究者は、学び続けられる環境において、自分の興味・関心のあることを仕事にすることができている幸せがある。そういった幸せに加えて、A氏やL氏の「語り」からは、「子どもの存在」が研究者としての仕事にプラスの影響を与えている様子も見て取れる。ここからは、「研究者」であり「母」であることが幸福度を高めていることも考えられる。

第3章 女性研究者の研究と育児の両立における葛藤と課題

第3章では、第2章でとりまとめた「語り」から見出されたいくつかの課題を考察する。第1に、自分の「研究」を進めることができない葛藤について考察を行う。第2に、非常勤講師の悩みについて取り上げる。第3に、周囲のサポートと性別役割分担意識に注目し、主に家庭内におけるジェンダー問題について考察を行う。第4に、育児中の理系の女性研究者の実態について明らかにする。

1 自分の「研究」を進めることができない葛藤

大学は、「教育・研究」を行う場であり、大学教員は、学生に授業を行うだけでなく、自分の研究も深め、その成果を広く社会に提供する必要がある。また正規の教員の場合、それに「大学運営」の業務もある。大学教員の仕事は、基本的に、「教育」「研究」「大学運営」の主に3つの柱で成り立っている。

しかし育児中の女性研究者たちは、自分の研究を進めることができない葛藤を抱えていることがわかった。研究の世界では、成果を出すことによって業績を積み重ねれば、キャリアアップをしていくことも、研究を続けていくこともできない。そのため自分の研究を進めることができない状態は、女性研究者に焦りや不安をもたらしている。

今回調査を行った女性研究者たちの「語り」の中で、葛藤を生み出す諸要因として多く見られたのが、「研究時間を確保することの難しさ」であった。研究というのは、天野正子が言うように、「集中性と持続性が要求される」もので、「まとまった時間」が必要なものであるからである²²⁾。そのため、第2章で取り上げたように、正規か非正規、また職位に関係なく、自分の研究は、大学の授業が開講されない春季休暇や夏季休暇、冬季休暇の間に行うようにしているという女性研究者が多かった。

ここでは、なぜ自分の研究を進めることが難しいのかといったことを中心に、女性研究者の「語り」から研究と育児の両立の難しさについて、より具体的に見ていくことにする。

(1) H氏の場合

11歳の子どもを1人で育てるH氏は、准教授として、これまで大学の中で、「教育」に重きをおいて仕事を行ってきたという。また、学生の教育だけでなく、学生が外国語を習得するための環境をより良いものにするために、学内のカリキュラム調整を行い、語学の授業を増やすなど、大学の組織の中での仕事に力を入れてきた。そのため、仕事と育児を両立させる中では、研究の時間を減らしてきた部分があるという。

H氏：子どもが生まれる前と比べると、研究の時間を減らしています。大学から給料をもらっている立場なので、どんな状況であっても、教育に使う時間は減らす事はできない。時間がたくさんあれば研究はできるけど。どこを削るか

22) 天野正子「女性研究者の地位と役割構造」金城学院大学『金城学院大学論集』79号、1978年、15頁

といったら、今は、研究の時間しかない。

育児中は、思うように自分の研究を進めることができないもどかしさがあるだけでなく、書く論文が少ないと昇進が遅くなることもある。しかし、H氏は、「苦勞があったとしても、正規教員にならなければならない」と言う。なぜなら、「定年退職するまでは職が確保されているから、子育てが終わった時点では、男の人と同じように研究できるっていうことにはなると思う」からだという。現にH氏の場合は、子どもが小学校の高学年になり、自分で身の回りのことができるようになったので、これから研究に力を入れていくという。

(2) F氏の場合

正規の教員には、「教育」だけでなく、それに加えて「大学運営」に関する業務もある。近年では、大学教員の業務において、「大学運営」の負荷が増大していると指摘する声もある²³⁾。次に紹介するF氏は、9歳の子どもの育児をしながら大学で教授を務めている。F氏の場合も、昇進に従って大学組織の中でも責任のあるポジションを任せられるようになったが、それによって「大学運営」に関する業務の負担が大きくなることで、研究を含めた自分の時間を管理することができるのかという不安があるという。

F氏：ちょっとずつ昇格していったら、業務の負担が大きくなっていく。上の人になったら、大学の管理運営のことをしなくてはならないが、今でさえあまりマネジメントできてないのに、時間がこれからちゃんと取れるんだろうかという不安があります。

大学内での打ち合わせや会議は、それぞれの教員の授業がない時間に行われることが多く、遅い時間から始まることもあるという。そのため、小さな子どもを持つ教員にとっては、保育園や学童保育へ迎えに行く時間と帰宅時間の調整が難しい場合もある。

F氏：大学内の委員会において責任のあるポジションでの仕事になると、打ち合わせとか会議も多くなるし、50代になると子育てが一息つくとかちまた書かれたりするけど、私たちの職場の人は、割と30代の後半で産む人も多いから、そしたら50代でもまだ育児の真っ盛りなので、それが重なるのがきついなあという感じがします。

研究者は比較的時間の自由がきく職業ではある。しかし育児中の正規の教員たちは、他の働く女性たちと同様、子どもが保育園や幼稚園、学校に行っている間に、仕事を行わなければならないが、その間は主に、「教育」（授業や授業の準備、学生の指導）と「大学運営」（大学内外の会議、時には入試・広報業務も含む）の仕事に時間が割かれる場合が多い。日中は、そのような「教育」や「大学運営」業務が

23) 篠原さやか「女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス」労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』62号、2020年

優先されるため、自分の研究は、「家に持ち帰る」ことになる。しかし、家に帰れば、子どもの世話があるために、自分の時間を持つことが難しい。それゆえ、先に述べたように、自分の研究は、大学の授業が開講されない春季休暇や夏季休暇、冬季休暇の間にしか行うことができないのである。

また、正規の教員は、ある程度のキャリアを積んでから結婚した場合、比較的高齢での出産となるために、「大学運営」に多く関わっていかねばならない時期と育児が重なり、精神的にも、また例えば子どもの送り迎え等の物理的な面でも、負担が大きくなることも見て取れる。

では、ここからは、育児中の今は、研究を思うように進められていないが、それに悩みつつも、長いスパンで考えることで、研究と育児の両立を前向きに捉えるようにしているI氏とL氏の「語り」を紹介する。I氏とL氏は、ともに正規の教員である。

(3) I氏の場合

I氏は、10歳と5歳の子どもを育てながら、大学で准教授を務めている。I氏は、基本的に平日は大学の授業や事務処理を行い、また他大学でも教鞭をとっているため、平日には自分の時間を取ることができず、自分の研究は、土日の夜や、授業が休みである長期休暇に行うようにしているという。それも、「実現できたときもあれば、できなかったときも多い」といい、研究が思うように進まないことが悩みではあるが、「完全に諦めてしまうと全くできなくなると思って、気持ちだけは持ち続けようと思っている」として、次のように語ってくれた。

I氏：現在、(研究と育児の両立について)とても難しさは感じますが、でも、私は、長いスパンで見ようとしています。これから2、3年は本格的にはできないと思うんですが、その間は研究書とか読んで蓄積しておいて、その後、論文を書いていきたいという感じで考えている。

I氏の「語り」からは、研究者人生を長いスパンで見ることによって、自分なりのワーク・ライフ・バランスのあり方を前向きに模索していることが伝わってくる。またI氏の場合、上の子どもはある程度自分のことができるようになってきたが、下の子どもが来年小学1年生であるため、仕事を少しセーブすることを考えているという。それも、人生を長いスパンで見ること、自分なりのワーク・ライフ・バランスについて考えた結果だと思われる。

ちなみに、働く女性の間で「小1の壁」²⁴⁾とはよく聞くが、今回の調査の中でも、「子どもが小さい時よりも小学1年生の頃の方が大変だった」という声がいくつかあった。小学1年生の頃が大変だったという理由については、小学生になったとはいえ、日常生活を送る上でまだまだ手がかかるという面もあるが、それだけではない。例えば、保育園の場合であれば、園によって、19時や20時までの延長保育があるが、小学校の学童保育になると、学童保育は17時～18時に閉まる所が多いため、

24) 子どもが小学校に上がるタイミングで仕事の継続が難しくなり、退職する母親が多いことから、働く女性たちの間で慣用的に使われてきた言葉。

帰宅時間を調整する必要が出てきたり、小学校では、PTA活動や保護者会などが平日に実施されるようになるので、平日に学校に足を運ばなければならない機会が増え、その都度、休みを取るのかどうするのか考える必要が出てくるからだという。

(4) L氏の場合

続いて、L氏の「語り」を紹介する。L氏は、4歳の子どもを育てながら、准教授を務める文系の女性研究者である。L氏も、研究と育児の両立をする上で、研究の時間が取れないことに難しさを感じていることを語ってくれた。

L氏：（研究と育児の両立の難しさを感じることにについて）一番の理由は時間かなと思う。今、役職も入ってくる年代なので、そういうのにも時間が割かれるようになって、そして授業もしていく。そこにプラスアルファで研究というのが、時間的なところで、難しいところもある。

ここから見えてくるのは、先に挙げたF氏の例と同じように、正規の教員がキャリアを重ねる上では、教育だけでなく大学組織の中での仕事にもウエイトが置かれるようになるために、研究の時間を思うようにとれない現状である。しかしL氏は、そのような状況を踏まえた上で、次のように言っている。

L氏：もともと自分が頑張っていた研究の領域があって、メジャーな論文にその領域の研究が積み重なっていくのを見ると、自分もそういう研究をしたいけど、できていないとか、遅れを感じることもある。でも、そこで自分に言い聞かせる、長期的なスパンで考えようと。今は、子育てを大事にしよう。それで得られたものがきっと研究の何かしらにつながると思っている。

L氏の場合も、先に取り上げたI氏の場合と同じように、現在自分の研究を思うように進めることができない状況であっても、人生を長いスパンで考えることによって、現在のワーク・ライフ・バランスを前向きなものに捉えることができていることがわかる。両立は難しく感じることもあるが、「今は子育てを大事にしよう」と考えているL氏は、育児の経験が研究者としての活動にポジティブなものをもたらす可能性・希望についても語ってくれた。このことについては、篠原さやかも、「ワーク・ファミリー・エンリッチメント」²⁵⁾ という概念を取り上げ、育児などの経験が、「研究者としての視野を広げ、研究活動に新たな視点をもたらすことや、教員としての学生指導においてもプラスの効果をもたらす可能性がある」と述べている²⁶⁾。

以上の2人の「語り」から、「教育」に加えて、「大学運営」の業務が忙しくなる中でも、研究者人生を長いスパンで考えることによって、自分らしいワーク・ライフ・バランスを前向きに捉えることができている例もあることがわかった。

25) ある役割における経験が別の役割における経験の質を高めること。

26) 篠原さやか「女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス」労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』62号、2020年、15頁

2 非常勤講師の悩み

自分の研究を進めることができないと悩んでいるのは、正規の教員だけではなく育児中の非常勤講師も同じである。非常勤講師は、1つの大学に所属する正規の教員ではないので、「大学運営」に関する業務はない。その点では少なくとも、正規の教員より研究時間を確保することはできるはずである。しかし、非常勤講師は、非常勤講師であるがゆえの悩みを抱えている。

(1) 非常勤講師の実態

ここでは、非常勤講師の実態を浮き彫りにさせるため、A氏とK氏の「語り」について掘り下げていくことにする。

A氏もK氏も、複数の大学において授業を受け持つ、文系の非常勤講師である。A氏は、現在2歳の子どもを抱え、福岡県内および山口県内の大学において授業を受け持っている。K氏は、現在1歳の子どもを抱え、福岡県内の複数の大学において授業を受け持っている。2人とも将来的に大学で研究を行っていきたいと考えており、そのキャリアを積むために、複数の大学で授業を行っている。

K氏は福岡県内の複数の大学で、8つのコマを持ち、毎日それぞれの大学に通勤している。授業時間を実働時間とみなすと、1日の実働時間は少ないが、それぞれの授業で授業内容、課題内容も違うため、準備時間を含めると、多くの時間を割いている。

K氏：大学に週3日勤めていた時は休みの日があったので、研究をする時間もあつたけど、今は毎日行かせていただいている。なので、育児と並行して、自分の研究の時間を見つけるのは難しい部分もある。そのため自分の研究は、睡眠時間を削って行ったり、夏休みや冬休みにまとめてやるって感じです。

このように非常勤講師であるK氏も、担当するコマが多いため、正規の教員と同様、仕事と育児を両立させる上で、研究する時間を確保することが難しい状況であることがわかる。正規の職を目指すには、論文を書き、学会で発表したり、雑誌に投稿したり、また博士号を取得するなど、研究業績を積むことが必要である。しかし、育児中の場合は、自分の研究になかなか時間を割くことができないのが現状である。

さらに非常勤講師は、もっと根本的な部分において、悩みを抱えている。

2006年度に早稲田大学女性研究者支援総合研究所が実施した調査では、特に、文系の女性研究者の多くが、博士課程修了後、非常勤講師としてキャリアを積むことで専任職に就くまでの数年をしのいでいることが明らかにされている²⁷⁾。理系の場合は、ポストドクとして何らかの研究ポストを得られる場合が多いが、文系では、そのような職はあまりなく、非常勤講師をひとつのキャリアにするしかない場合が多い。そのため、笹野悦子は「男性よりも女性の方が、より見通しが立てにくい」と述べている²⁸⁾。A氏もK氏も、そのような文系の女性研究者に該当する。

27) 早稲田大学女性研究者支援総合研究所『研究者養成のための男女平等プランに関する調査(4)若手研究者の現状と支援ニーズ調査報告書』2007年

28) 笹野悦子「まとめ-若手研究者の実情と支援に向けて」『研究者養成のための男女平等プランに関する調査(4)若手研究者の現状と支援ニーズ調査報告書』早稲田大学女性研究者支援総合研究所、2007年、190頁

K氏は、非常勤講師という「立場」ゆえの悩みを次のように語る。

K氏：厳しい目線で見たら非常勤である私が悪いんだけど……。日々、教育も研究もしながら一生懸命やっているのに認められてないんだなって痛感する。

安定したポストを得るためには、研究し業績を上げる必要がある。研究業績を上げるためには、研究費が必要不可欠である。しかし非常勤講師の状態では、研究費の獲得にたどり着くことさえ難しい障壁が存在する。例えば、科学研究費助成事業²⁹⁾へ応募をしたくても、研究機関と認定されている組織に所属しなければ研究者番号が付与されず、その申請すらできない。大学によっては条件によって研究番号を与える場合もあるようだが、非常勤講師の場合は、「研究者」としてでなく「教育者」として雇用されているために、認められない場合が多いようである。

このように、研究費を獲得するためのチャンスを得ることもなかなか難しいことに加え、そこに出産・育児が重なってくると、研究を継続させること自体も難しくなってくるのである。そのため、研究者としてのキャリアを諦める決断をする女性研究者も出てくるのが現状で、ここでは取り上げないが、聞き取り調査の中でも、知り合いの例として、そのような話がいくつか聞かれた。

非常勤講師の研究費に関連する金銭的な問題について、A氏も次のように語った。

A氏：金銭的な我慢はいつもしている。研究費は大学からもらえないから、個人の私費から出さないといけない。でも、今お金を使いたい対象として、子どもの教育、子どものおもちゃがある。欲しい本何冊分になるよね。そういう時に、ああ、正規だったらいいのになって思う。

研究を続けていくためには、非常勤講師で得た収入から研究費を捻出しなければならないが、「子どものものを買いたい」という母親としての思いも強くあり、そこでも葛藤があることが感じられる。

(2) 「社会的に認められていないのではないか」という不安

また、非常勤講師は、「社会的に認められていないのではないか」といった不安や違和感を抱いている面がある。

その一例として、まず取り上げたいのが、「保育園問題」である。第2章でも取り上げたA氏の発言を再び取り上げる。

A氏：保育園考えた考えた。でも点数が足りない。非正規で、「これだけしか（時間的に）縛られないでしょ」というのがあったので、私はさらに、時間外労働を踏まえたシフト表を作った。月から土まで時間を書いて、ここからここ、何時から何時、時間外労働がいる。で、計8時間以上毎日仕事しないといけないって書いたけど、認められなかった。(略)おそらく非正規の女性がぶち当たる壁は、保育園問題。認可外の保育園だったら受け入れがあるけど、バカ高い。非常勤だからそんなに稼いでないのに。

29) 人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」(研究者の自由な発想に基づく研究)を格段に発展させることを目的とする競争的研究資金。

A氏の「おそらく非正規の女性がぶち当たる壁は、保育園問題」という言葉にあるように、非常勤講師の場合、子どもを認可保育園に入園させることには厳しいハードルがある。

認可保育園とは、施設の広さや保育士等の職員数など国が定めた認可基準を満たし、都道府県知事に認可された保育園のことであるが、認可保育園の場合、保育料は親の世帯収入によって決められているため、認可外の保育園よりも、安くなることが多い。それゆえ、認可保育園の入園希望者が多い。入園希望者が多数いる場合は、選考が行われ、その際、保育が必要であるという「点数」³⁰⁾が高い方から入園児を決定する決まりになっている。しかしフルタイムで働いていない非常勤講師の場合は、基本的に「点数」が低く、入園させることが難しいのである。A氏の場合では、申し込みの申請時に、授業時間以外にも授業の準備などで労働をしていることを示すためにシフト表を作って提示したが認められず、子どもを認可保育園に入園させることはできなかったという。

このように、保育が必要とされるくらいに「十分に働いている」にも関わらず、それが認められないということは、自分が「社会的に認められていないのではないか」という不安につながる。

非常勤講師という仕事が、家族からも適切な理解を得られていない場合もある。K氏の「語り」を取り上げる。

K氏：(夫は)最初は私の仕事を認めてくれて結婚したんだけど、ある日から、「非正規だよな」って見てくるようになって。「私も仕事をしている」ということを認めてほしい。(略)今私がコマ数何個持っているとか、準備にどれだけかかっているか、とか。

非常勤講師も、専門的な知識や教育者としてのスキルも求められる専門性の高い仕事である。また、K氏の場合は、先に取り上げたとおり、週に8コマの授業を持っている。週に受け持つ授業数に限って言えば、正規の教員と同程度に「教育」に携わっていることになる。しかし、「非正規」という点に焦点が当てられ、K氏の仕事に対し、正当な認識がされていないことがわかる。非常勤講師が置かれている社会的な立場も含め、非常勤講師の実態について、もっと世の中に知ってもらう必要があるように思われる。

仕事への理解に対する違和感については、A氏の家庭についての「語り」の中にも出てくる。

A氏：夫は優しいけど、私が(研究で)好きなことを追いかけているので、それが仕事に見えない時があるみたいで。(授業の)時間外の準備とかしていると、「そこまでしないとイケないの?」「娘にもっとかまってくれませんか?」っていうことが結構あったので、一度プチ家出した。

30) 「点数」は正式には「指数」と呼ばれ、指数の種類には、「基準指数」(就労状況(フルタイムかどうか)や健康状態といった保護者の基本情報をポイント化した点数のこと)と「調整指数」(家庭の事情に合わせて加点・原点の調整をする点数のこと)がある。父親と母親それぞれの基準指数を合算し、調整指数の加点・原点を行ったものが家庭の持ち点となる。

パートナーの「そこまでしないとイケないの？」という言葉は、A氏が、授業の準備に夜中までかかって取り組んでいることで体調を崩しそうなのを心配してかけたものだったというが、A氏は、自分の仕事が軽く見られたような違和感を持ったのだという。

A氏は、授業の質が落ちたら「あの人、非常勤だから授業のクオリティが低いよね」と言われるかもしれない、という不安と戦いながら、授業の準備に多くの時間を割いている。非常勤講師も、1つ1つの授業に熱意を持って、授業の質を上げるために、試行錯誤を行っているのである。

A氏は、余裕のなさが子どもにも伝わってしまい、子どもに心配をかけてしまったことについても話してくれた。

A氏：これ聞いた時に泣いてしまった言葉があって、今も泣きそうになっちゃうけど、娘が、「〇〇が幼稚園に行ったら、ママ嬉しいの。だから幼稚園行くの。」って言ったの。私を喜ばせるために幼稚園に行くんだって。それってどういうことって思った時に、自分が邪魔になってるから、自分が行くって。

育児中の非常勤講師は、正規の教員との待遇の差も相まって、働きが社会に認められていない不満と先の見えない不安を抱えながら、育児と仕事・研究の両立を図っている。

3 周囲のサポートと性別役割分担意識

育児中の女性研究者が研究を続けていくためには、周囲のサポートが必要である。ここでは、特にパートナーとの関係やパートナーによる役割分担のあり方に注目し、そこに、性別役割分担意識の概念がどのように働いているかについて見ていくことにする。

性別役割分担意識とは、男女を問わず個人の能力等によって役割の分担を決めることが適当であるにも関わらず、「男は仕事・女は家庭」「男性は主要な業務・女性は補助的業務」というように、男性、女性という性別を理由として役割を分ける考え方のことである。

戦後の高度経済成長期に広まったこの「男は仕事・女は家庭」という性別役割分担意識は、1985年に成立した「男女雇用機会均等法」を始め、1999年に施行された「男女共同参画社会基本法」などといった法整備によって、性別に関わりなく、個人個人を尊重する社会の実現が目指される中で、少しずつ解きほぐされていった。女性の社会進出が進み、その一方で、近年では、「イクメン」といった言葉が世の中に浸透していることからわかるように、男性の家事・育児への積極的な参画も見られるようになった。

内閣府の『男女共同参画白書』にもその変化が現れている。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、1979年の調査結果では、「賛成」という回答が70%を超えているが、2016年の調査結果では、「賛成」よりも「反対」とする回答が上回っている³¹⁾。

31) 内閣府『男女共同参画白書 令和元年版』2019年、117頁

近年福岡県内で行われた調査においても、「男は仕事、女は家庭」という考え方について、「同感しない」と「あまり同感しない」を合わせた「反対」意見が、56.7%を占めており、「同感する」と「ある程度同感する」を合わせた「賛成」意見の40.7%を16ポイント上回っている³²⁾。

しかし、そのような世の中になってきていても、夫は「稼ぎ手役割」、妻は「家事役割」といったような意識はいまだに強くあるようである。例えば、大阪府で行われた調査では、「生活費を稼ぐのは男女どちらの役割だと思うか」という質問に対し、男女ともに「男」と答える割合が高く、特に男性の約7割が、そのように答えている³³⁾。一方、国立社会保障・人口問題研究所が実施した『第6回全国家庭動向調査報告書』によると、夫と妻の家事分担割合の平均は、妻83.2%に対し、夫16.8%であり、妻の負担割合が圧倒的に多いことがわかる³⁴⁾。

今回調査を行った女性研究者の家庭では、第1章におけるアンケート調査の結果で示したように「家事・育児についてのパートナーの分担はありますか」という質問には、「十分ある」という答えが7名(58.3%)、「ある程度ある」という答えが3名(25%)、「あまりない」という答えが1名、無回答1名であった。このように今回調査を行った女性研究者の家庭においては、パートナーによる家事・育児の分担が「十分に」少なくとも「ある程度」あるということが明らかになった。しかし、聞き取り調査を進める中で、次に取り上げる例からは、結婚や育児の事情を通してパートナーとの分担が、意識的に、あるいは無意識のうちに性別役割分担意識に引きずられている様子が推察された。

(1) 「語り」の中で見られた性別役割分担意識

はじめに、複数の大学で非常勤講師を勤めるA氏の例を紹介する。A氏のパートナーは同じ大学院の先輩だった。A氏のパートナーも研究者を目指すか、就職するのか悩んでいたが、A氏との将来のことも考えて就職することを選んだという。A氏は、結婚において、「そこが1つの問題だった」と言う。

A氏：彼はいろいろ迷ってたんだけど、経済的なこともそうだし、私と結婚をどうするかっていうのもあって、民間の就職試験に通ったから、そっちでお金を稼いでやっていくっていう選択をしたんですよね。海外だったらお金をもらって研究を行う制度が整っているところもあって、もしそういうところだったら、お互い、やりたい研究を続けることもできたのかもしれない。お金のことは関係なく、「やったもん勝ち」っていう意見もあるかもしれないけど、やっぱり男の人はね。男の人はとか言ったら、ジェンダー問題に触れるかもしれないけど、男の人の中には、「養いたい」って人もいると思う。私は優しい夫を持ったと思っている。

この「語り」からは、研究者を目指す者同士の結婚や将来において、やりたい研究を続けることの難しさ、研究生活を続けていく上での経済的な難しさが見えてく

32) 福岡県人づくり・県民生活部男女共同参画推進課『男女共同参画社会に向けての意識調査報告書』2020年、23頁

33) 大阪府「男女共同参画に関する府民意識調査」2019年、32頁

34) 国立社会保障・人口問題研究所『第6回全国家庭動向調査報告書』2019年、15頁

る。

また、ここで注目したいのが、A氏の「男の人の中には、『養いたい』って人もいると思う」という言葉である。A氏の「優しい夫を持った」という言葉にあるように、A氏のパートナーの決断は、「パートナーを支えたい」という優しさからきたものである。一方で、「男性が稼がなければならない」という意識も、日常生活の中に根強くあることがうかがえる。またそれは特に男性によって意識されることは先にも述べたとおりである。そのような意識がどのようにして形成されてきたのかも含め、「男性の性別役割分担意識」についての研究は今後の課題としたい。男性にとっても、生きやすい社会の形成を目指し、男性の固定的な性別役割分担意識の解消が進むことが望ましい。

また、その他の女性研究者の「語り」の中からは、女性研究者がパートナーと同じ「稼ぎ手」でもあるにも関わらず、主体的に、「家事・育児役割」を引き受けている様子も一部でうかがえた。

幼い子どもを持つ非常勤講師のK氏と、そのパートナーの育児分担にまつわる話を取り上げる。

K氏：(夫は)子どもが大好きだから手伝ってくれる。抱っこしてくれたりするし、散歩に連れてってくれたりするし、絵本を楽しく読んでくれたりする。この人がパパでよかったなって思う。でも(育児で)大変なことは私にふってくる(笑)。夜泣きとか全部、私。(夫は)絶対起きない。そういう一番大変なところは、当たり前みたいな感じで私に任せるから、私がやらなければならない。

K氏：お母さんって、体調が悪くても子どもの面倒は見るじゃない。でも、夫が体調悪いときは、私に押し付ける。

ここからは、パートナーは「できるときに」「できることを」分担してくれるものの、例えば、夜中、あるいは体調が悪いときには、女性側が子どもの面倒を見るしかない状況が浮かび上がってくる。男性が「稼ぎ手役割」を意識するのと同様に、女性側も、「やらなければならない」ものとして、主体的に育児を引き受けてしまう側面もあるように思われる。

今回の調査においては、女性が、主体的に育児を引き受ける実際の背景について、内面的に掘り下げることができなかつたので、それについては今後の課題にしたいと思う。

(2) 新たな役割分担意識

しかし、今回の調査では、女性研究者が「主な稼ぎ手」となり、パートナーが「家事・育児役割」を行う形で、女性研究者を支える例も見られた。

まず、アンケート調査における「家事・育児についてのパートナーの分担がありますか」という質問に「十分ある」と答えてくれたC氏の例を紹介する。C氏は、9歳と6歳の子どもを持つ正規の大学教員である。約2年前までは、パートナーの仕事が忙しかったため、ほぼ1人で育児を行っていた。しかし、たまたま仲の良い同僚が子どもを持つ外国人で、育児について話をする中で、自分がこれまで持って

いた「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という価値観に変化が起きたという。

C氏：出産・育児や親の役割の違いなど日本以外の価値観を知ることで、母はこうあるべきという日本的な価値観に縛られることがなくなり、精神的に救われた。

そのようにしてC氏は、出産・育児についての新しい価値観に気づき、パートナーと話し合い、家事・育児についての分担のあり方を見つめ直した。そうして今は、パートナーの方が仕事をセーブする形で、パートナーが家事・育児に専念しているという。

このように、周囲の人と家事・育児のあり方について話し、悩みを共有することは、それぞれの家庭の家事・育児の分担方法について見つめ直すきっかけにもなるのである。

同じようにパートナーの分担が「十分ある」と答えてくれたI氏の例も紹介する。I氏には、10歳と5歳の子どもがいる。I氏のパートナーも、家事や育児を主に行う形で、I氏の仕事をサポートしている。I氏のパートナーはもともと会社に勤めるサラリーマンであったが、I氏と結婚し、子どもが生まれるタイミングで仕事を辞め、育児に専念した。

I氏：夫はサラリーマンをやっていたが、子どもが生まれて仕事を辞めて、上の子が小学校に上がるまでは、主夫をしてくれた。それじゃなかったら（研究は）できていなかったと思う。

I氏は、「私の研究生生活は育児とともにあった」と語ってくれたが、それができたのは、パートナーが「主夫をしてくれた」おかげだと言う。なぜなら、I氏は、小さな子どもを抱え、大学の教員の仕事を勤めながら、さらには、東京の大学院に入り直し、博士論文を書く決意をする。大学院で、半学期の間に必要な単位を取るために、週に1回東京に行くなどとても多忙であり、この間の研究の活動は、とても育児と両立できるようなものではなかったという。そこで、パートナーの協力は不可欠であった。

天野正子が、「研究活動は、家庭役割の『片手間性（パートタイムネス）』では成り立たない」と述べているが³⁵⁾、育児中の女性が、仕事をしながら、本格的な研究活動を行う（例えば、I氏のように、大学院で単位を取得し調査を行い博士論文を書く）ことは、パートナーないし周囲の全面的な協力を得ることができなければ、本来、時間的にも物理的にも難しい側面があるように思われる。本当は研究の成果を上げたいと思っても、育児中はどうしても全力で研究に取り組むことができない、つまり、「片手間」でしか研究に取り組むことができないために、研究者として葛藤を抱くのである。しかし、パートナーの全面的な協力を得ることができないのも現実的な問題である。

35) 天野正子「女性研究者の地位と役割構造」金城学院大学『金城学院大学論集』79号、1978年、15頁

I氏自身も「夫が会社員のままでは研究活動を行うことはできなかった」と言っているが、例えば、男性側がどんなに家事・育児の分担をしたいと思っても、仕事を優先せざるを得ない現実もあるように思われる。

(3) 「男性が育児を優先させること」に対しての世の中の目線

内閣府が、2008年度に12歳未満の子どもがいる男性を対象に、生活の中での「仕事」「家庭生活（家事・育児や家族との生活）」「個人の生活（個人的な趣味や学習、知人との交流など）」の優先度の「希望」と「現実」についての調査を行っている³⁶⁾。その調査によると、「希望」としては、「仕事を優先」という回答はほとんどない（0.8%）にもかかわらず、「現実」では、「仕事を優先」という回答が60%にも上っている³⁷⁾。

それは、近年推奨されつつある「育児休業」をめぐる男性の現状にも表れている。育児休業は性別に関わらず全ての労働者に認められている権利³⁸⁾であるが、特に男性にとっては、育児休業を取りたくても取れない現状がある。

厚生労働省が行った「雇用均等基本調査」によると、2016（平成28）年度の男性の育児休業取得率は、3.16%である。女性の取得率が81.8%であるのに比べると、男性の取得率は極めて低いことがわかる³⁹⁾。

また内閣府の『平成29年版少子化社会対策白書』においても、育児休業の取得をめぐる「理想」と「現実」の乖離^{かいり}が指摘されている。それによると、内閣府が2015（平成27）年度に行った「平成27年度調査 少子化社会に関する国際意識調査報告書」では、子どものいる男性の3割が「直近の配偶者・パートナーの出産時に1カ月以上の育児休業を取りたかった」と回答しているのだという⁴⁰⁾。しかし先ほど取り上げたように、実際の育児休業取得率は、3.16%にとどまっており、取得意向と取得の実態との間に乖離があるのである。

では、そもそもなぜ男性は育児休業を取得しにくいのだろうか。同じく『平成29年版少子化社会対策白書』では、正社員の男性が育児休業を取得しなかった理由についての調査結果⁴¹⁾が取り上げられており、それによると、「職場が育児休業制度を取得しづらい雰囲気だったから」（26.6%）「会社で育児休業制度が整備されていなかったから」（26.0%）といった理由が上位を占め、そのあとに「残業が多い等、業務が繁忙であったため」（21.2%）という理由が続き、職場環境に関する理由が多く挙げられているのがわかる⁴²⁾。

このように、「職場が育児休業制度を取得しづらい雰囲気だったから」という理由が一番であることに見られるように、日本の現状においては、いくら男性が育児休業を取得したいと思っても、それを快く思わないまではないが、それを当然

36) 内閣府『平成20年度少子化施策利用者 意向調査の構築に向けた調査報告書』2009年

37) 同上、51頁

38) 育児休業は、1歳に満たない子を養育する労働者が、事業主に対して申し出ることにより、原則として子が1歳に達する日までの連続した期間に子の養育のために取得できる休業制度である。事業主は、業務の繁忙等を理由に、育児休業の申出を拒むことができない（育児・介護休業法第5条、同第6条）

39) 厚生労働省「平成28年度雇用均等基本調査」2017年、14頁

40) 内閣府『平成29年版少子化社会対策白書』2018年、70頁

41) 厚生労働省委託調査「平成27年度仕事と家庭の両立支援に関する実態把握のための調査研究事業報告書 労働者アンケート調査結果」男性・正社員（末子が3歳未満の正社員・職員1500名）を対象として行われた調査。複数回答あり。

42) 内閣府『平成29年版少子化社会対策白書』2018年、71頁

のこととして認めない「職場の雰囲気」があるように思われる。

今回の調査においても、「男性が育児を優先させること」に対する世の中の見線がどのようなものなのかをリアルに感じさせる一例があるので、ここで紹介する。

G氏は、3歳と1歳の子どもを育てる理系の准教授である。G氏のパートナーは会社員であるが、G氏の研究活動に理解があり、家事・育児を積極的に行い、G氏の仕事をサポートしている。例えば、学内の会議は教員の授業の都合で、夕方から開催される場合が多いことは先にも述べたが、G氏が夕方から会議があり、子どもを保育園に迎えに行けない場合は、G氏のパートナーが有休を取り、子どもを迎えに行くことにしているという。G氏は、そこで、大学側と会議の日程調整を行う際に感じる違和感について語ってくれた。

G氏：「(大学の事務の方に) 会議が夕方だと夫に有休を取ってもらわないといけないので、一応夫の都合もあるので早めに教えてもらえますか」と言うと、すごく恐縮される。毎週会議がある訳ではないので、その時休を取ってもらっても私は何も負い目を感じないし、事務の方も恐縮することはないと思う。そういった周りの反応にちょっと違和感を覚えます。逆だったらそんな思わないですよ。

(4) 育児を行う上で利用したサポートについて

今回協力いただいた女性研究者の中には、シングルマザー、または結婚していてもパートナーと別居している例も見られた。研究職は、就職先のポストが限られていることなどから、仕事上の理由でパートナーとの別居を経験する割合は高い。2016年に「男女共同参画学協会連絡会」が行った調査では、女性研究者の49.7%が別居の経験があることが明らかにされている⁴³⁾。パートナーと同居していない育児中の女性研究者の場合、研究と育児を両立させる上では、実家の家族や社会的なサポートの力を借りずには成り立たない。

今回の調査でも、育児を行う上で利用したサポートとしては、実家の母親や社会的なサポートの力を借りている例が多かった。中でも、正規の教員では、保育園に加え、積極的にベビーシッターを利用している例が特徴的であった。

シングルマザーのH氏は、実家が遠くサポートを得ることができなかったので、子どもが小さい時は、保育園に18時まで、時には延長保育で19時までの利用をしていたが、19時までに迎えに行けない夕方の会議の時や土曜日は、子どもの世話をベビーシッターにお願いしていたという。

H氏はベビーシッターの利用について次のように言っている。

H氏：毎週土曜日は保育園に行っても良かったんですけどかわいそうだったので、ベビーシッターを頼んで家で仕事をしていました。ちょっとお金をかけてでも、子どもに寂しい思いはさせないようにして、それでいて、私のこともしよう、と。でもそれができるのは専任の給料があるからですよ。

43) 男女共同参画学協会連絡会「第四回 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」2017年、82頁

子どものためにも、仕事をする自分のためにも、お金をかけて社会的なサービスを利用することは、自分らしく研究と育児を両立させる上で重要なことである。しかし、それは正規の仕事つまり安定した収入がないと難しい。先に紹介したH氏の「苦労があったとしても、正規教員にならなければならない」という言葉は、こういったことにもつながってくる。

次に、E氏は、10歳の子どもを育てながら大学で教授を務めている。E氏もH氏と同様、仕事と育児の両立を図る上で、積極的にベビーシッターの利用をしてきたという。自身の母親を介護していたときの経験から「大変な時は人材派遣のサービスを頼る」ということを決めていたため、「ベビーシッターの会社に連絡を取るのがしやすかったのかもしれない」と前置きし、出産後からベビーシッターを利用し、教育や研究を継続してきたという話をしてくれた。E氏は、「日本では、母親がつらい時にベビーシッターを利用するという考え自体があまり浸透していないことで、1人で育児を抱え込んでしまっている母親もいるのではないか」と言う。そして次のように語った。

E氏：時には気軽にベビーシッターを雇える世の中になっていないと、研究は続けられないですよ。ね。(ベビーシッターを利用すると)1時間1700円かかります。交通費もあるし、例えば1時間では呼べない。2時間からなので、すると3400円。プラス交通費となると1回に5000円はかかるんですよ。ね。(略)非常勤の仕事だとなかなか大変だろうなあと。

E氏の「語り」からも、H氏の「語り」と同様、ベビーシッターを利用するためにはある程度の金額がかかってくるために、正規でなければなかなか利用が難しいという現状が浮かび上がってくる。

そういったことを含めて、「時には気軽にベビーシッターを雇える世の中になっていないと、研究は続けられない」と言う言葉は、女性研究者が研究と育児を両立させようとするのが現状では難しいものであることを示しているように思われる。

仮にパートナーの分担も得られず、実家が遠いなどの場合でも、保育園や本項で取り上げたようなベビーシッターなどの社会的なサービスを利用することができれば良いが、コマ数の少ない非常勤講師の場合は難しい。そのため、自分では、研究と育児を両立させていきたいと思っても、社会的なサービスを利用できるか利用できないかによって、仕事を諦めざるを得なかったり、研究を断念してしまう女性研究者もいるということがいえるだろう。

女性研究者が大学の仕事と育児を両立させる上で、大学の「組織的なサポート」を必要とする意見もあった。

B氏は、6歳の子どもを育てる文系の准教授である。B氏は、同じ研究者であるパートナーと別居し、仕事と育児の両立を図っているが、その両立において、大学の業務を行う上で難しさを感じる面があるという。

B氏：子育て、介護中の教員は、入試等代替者がいない特殊な業務に従事することが難しい。とりわけ、配偶者と離れて単独子育て中の研究者にとってそれは

一層難しい。

B氏は、これまで、民間シッターへの依頼や遠方に住んでいるパートナーに日帰りで来てもらうことでそのような業務に従事してきたというが、「しかしそれも限界がある」として、「組織としてのサポートが無ければ、子育て中の研究者がキャリアを築くことは極めて難しいのではないか。」と指摘する。

4 理系の女性研究者の実態

今回の調査において理系の女性研究者は11名中3名であり、データとしては少ないが、理系、特に実験系に特徴的な研究・教育のあり方について話を聞く中で、実験系の女性研究者が研究と育児を両立させることは、特に困難を伴う局面が多いことがわかった。そのような中で、さまざまな工夫やサポートを受けながら研究を行っている3人の女性研究者の事例を取り上げることで、理系の女性研究者の現状について紹介したい。

(1) D氏の場合

「女性が、育児などで早く帰宅することをよく思わないという方が、まだ（現場において）一定数いらっしゃるかもしれません。」と言うのは、実験系の研究室でプロジェクトを持つD氏である。D氏は、「目が開いているときはずっと研究のことを考えている」と言う。例えば、文系の研究者は、自分の研究を「家に持ち帰る」こともできるが、理系の中でも、実験系の研究をする研究者には、基本的に、実験するための設備が必要であり、その研究を進める上で、研究室に長時間いることが求められる。

D氏：例えば、朝9時に（実験の）反応をかけて、準備して、10時くらいから反応開始して、12時に終わって、後処理をして、15時か16時には終わるよねっていうので、計画を立てるのですが、10時にかけての反応が12時に終わらないことがある。終わらないと、もっと温度を上げてみようとか、試薬を加えるとかして、反応の条件を検討すると、13時、14時。まだ終わらないと15時。それでも終わらないと、夕方17時になってしまったと。そこから後処理をして、となると遅くなる。

その上で、准教授であるD氏は、学生に指導しながら、その後自分の論文を書くことや、事務処理などの作業をすることも必要となってくる。

また、「反応をかける人と構造解析をする人とデータをまとめて解析する人とかいろいろな人がいるんですよ。特に博士課程の学生さんが博士号を取るなんて時は絶対間に合わせないと取れないなんてことになってくるから、それに向けて（作業を）進めなければならない。」と言うように、実験系の研究は、学生を含めた複数人の協力のもとで進めるものであることがわかる。長時間にわたって研究に関わることが研究の可否、また、学生の博士論文にまで関わってくるのである。

理系の現場では、そのような「長時間労働が当然」であるため、出産や育児などによって、男性と同じように長時間労働ができない女性に対して、風当たりが強い

一面があるのも現状のようである。

D氏の聞き取り調査に同席した女性研究者も、理系の現場について、次のように言っている。

「理工系は夕方早く帰るというのについてすごくマイナスに思っている方がいまだにいて。それで本当に長時間労働なんです。長時間労働が当たり前だと思っているので、例えば、妊娠して、子どもができてという、男性と同じような長時間労働はできないような状況の人に対しても、『それ自分で好きでやっているんだよね。自分で選択したんだよね』って、『それで“できません”ってどういうことなの』ってそういう論理がまだまだ通用する場所なんです。だから、女性がなかなか働きづらい感じではある。なので、もともと少ないんですけど、(女性研究者が)全然増えてないっていうのはそういうところにもある。なかなか仕事を続けていきづらい環境がある。内部で、人間関係を含めて。」

しかし、D氏は、厳しい状況の中でも、職場の上司や仲間の精神的な支えに救われてきた面が大きいと言う。

D氏：出産・育児しながらとなると、信頼できる上司の方がそばにいてくださると心強いし、安心して仕事ができる。

D氏：周囲にわかってくださる方がいらっしゃるかどうかがとても大きいと思う。時間的な難しさもあるのですが、そこに精神的なサポートが必要なのかなあと。個人個人でいろんな状況が違うと思うので。

D氏は、その話の中で、D氏の大学において、妊娠中の女性研究者、子どもを育てる男性・女性研究者をサポートするための「在宅勤務制度」が導入される際、当時の男女共同参画推進室の室長が女性研究者にヒアリング調査を行い、「現場でどのようなサポートが必要とされているか」について話を聞いてくれたことが嬉しかったというエピソードを語ってくれた。当時の室長は、同じ育児経験者の女性研究者であったことで、話がしやすく、「とても心強かった」という。また、D氏は、「さまざまな困難がある度に、その室長が温かくサポートして下さった。その方がいらっしゃらなかったら、自分はどうなっていたらろう。」と語った。

このように、育児中の女性研究者にとって、育児経験者や、同じ立場の研究者と話をしたり意見を交換したりすることは、そういった機会を持つことだけでも、精神的な支えになることがわかる。今回の調査においても、研究と育児の両立で精神的につらかった時に、同じ育児中の女性研究者に相談することで乗り越えることができたというエピソードをいくつか聞くことができた。女性研究者が仕事を進めていく上では、女性研究者同士の悩みを相談したり意見を交換することができるような交流の場を設けることも大切なことのように思われる。

(2) J氏とG氏

J氏は実験系の研究室で准教授を務める女性研究者である。J氏の「語り」からも、理系研究者の「長時間労働が当たり前である日常」が見えてくる。

J氏：大学に9時に来るじゃないですか。9時から18時までは、学生相手の仕事をしたり、事務的な仕事とか、学科の会議に出たりとか。それが日中の仕事で、それから、学生が残っていれば（実験の）細かい指導をしたりとか、学会の仕事をしたりとか。それで気がついたら21時とか22時になっていますね。それでも、帰りがけに建物を見ると、まだ他の部屋の電気が明々としてますからね。

J氏：平日は、子どもの顔はほとんど見ないですよ。21時半とか22時とかに帰ってきて、毎日、寝室では一緒に過ごしているんだけど、子どもは、寝ている状態なので。本当に朝1時間しか会わないんで。

14歳と10歳と8歳の3人の子どもの持つJ氏は、実家の近くに居を構え、パートナーの家事・育児の分担や祖父母のサポート、時には自身の長子の力も借りながら、仕事と育児の両立において、現時点では、仕事を優先的に行っている。今、研究で実績を積み、キャリアアップすることによって、「本当に自分のやりたいことをする」ことが目標なのだという。その目標には、研究だけでなく、女性研究者が生きやすくなるような環境づくりも含まれている。

J氏：将来が不安だったり、ここで言い返したりしたら次がないんじゃないかと思って我慢したりとか、そうこうしながらも地域では、「あの人は全然子どもの面倒も見ていない」とか言われたりとか、そんな経験をしてきました。確かに、みんなが（周囲の人間に）「子どもを見ておいて！」と言える人ばかりじゃないから。でも、こういう人がいてもいいんだよ、っていうのが見せられたらいいなと。もしかしたら、私みたいなのがいることによって、研究の世界でもっと楽に生きていける女の人が出てくるかもしれないから、本当に自分のやりたいことをするために、上のポストにいきたい。

またJ氏は、自身の妊娠・出産体験を踏まえた上で、女性研究者が妊娠したこと、妊娠初期の体調不良や不安などを、周囲に「ある程度オープンに言えるようになっていないと、女の人の負担が増えるだけ」だとし、自らの体験を周囲に語るようにしているという。

女性研究者同士の悩みを相談したり意見を交換することについての重要性については先に述べたが、女性研究者がより仕事をしやすくするためには、女性同士だけにとどまらず、男性も含めた環境で、女性研究者が抱える悩みや意見を共有していくことも必要なことのように思われる。

3歳と1歳の子どもの育てる准教授のG氏も、実験系の研究室で研究を行っている。G氏も、「子どもといるときは子ども優先」としながらも、「自身のベースは研究者」であるといい、普段は「研究を優先」している面が強いという。そのためには「ある程度近くにサポートしてくれる人がいないと厳しい」として、パートナーの分担や実家のサポートを十分に受けられている自分の状況に感謝しつつ、平日だけでなく、土日も研究を行っている。

そこには、自分が研究を進めることによって、困っている人を助けることができ

たり、「世の中が便利になると嬉しい」という思いがある。またG氏は、研究のやりがいについて次のように語った。

G氏：研究成果を論文にして世間に公表するんですけど、論文によっては、1800年代とかすごく古くから、ずっとアーカイブがあってそのまま残っているものもある。私たちが死んだ後も論文が残っていくと考えた時に、ちょっと感動する。自分が生きた証が世に残っているというのは、とてもやりがいを感じる。

このように研究者は、新しい研究の展開に向かって、それぞれにやりがいを持って研究に臨んでいる。またG氏は、次のように言う。

G氏：女性が働く上では、私からしたらこの仕事は結構いいと思う。研究結果は出さないといけないけど、比較的自分の裁量で時間を使えるので。また、大学とかだと福利厚生もしっかりしているのももちろんやる気次第ですけど、子育てしながら続けていくにはいい仕事だと思う。

女性研究者の現実として、育児中に研究を進めることには、人によってさまざまな困難があるが、研究者人生を長いスパンで考えてみると、女性が大学に所属し研究を行うことは、先に取り上げたように、分野や研究室によっては「長時間労働の問題」等はあるけれども、それでも基本的に比較的自分の裁量で時間を使えたり、福利厚生がしっかりしているという点では、研究を続けていく環境が整っている面もある。そのためG氏は、「女性が研究者として生きること」にポジティブな意見を持っている。

J氏とG氏の場合は、今現在の自身の目標ややりがいのために、周囲のサポートに感謝しつつ、育児中であっても、仕事を優先させている。それは、研究と育児の両立のあり方が、人それぞれで、さまざまな形があっても良いということを教えてくれる。

第4章 まとめと今後の課題

1 まとめ

本調査では、福岡県内の大学において、研究活動を進めながら出産・育児というライフイベントを体験している女性研究者に対して聞き取り調査を行い、女性研究者たちが、研究活動と育児の両立－「研究者としてのキャリアを重ねること」と「母として子どもを育てること」の間で、具体的にどのような問題に直面しているのかについて明らかにしてきた。

(1) 研究と育児の両立の難しさ

まず、大学で働く育児中の女性研究者たちが葛藤を抱く原因には、思うように自分の研究を進めることができないという問題があることがわかった。研究の世界では、成果を出すことによって業績を積み重ねれば、キャリアアップをしていくことも、場合によっては、研究自体を続けていくこともできない。そのため自分の研究を進めることができない状態は、女性研究者に焦りや不安をもたらしていく。

大学は「教育・研究」を行う場であるが、正規の教員の場合は、それに加え、「大学運営」の仕事に携わる必要がある。研究には、「集中性と持続性」が要求されるためにまとまった時間が必要であるが、複数の授業を持つことに加え、「大学運営」のための仕事の負荷が大きく、日中は自分の研究にあてる時間を持つことが難しい。そのために自分の研究は家に持ち帰ることになるのだが、家に帰ると家事や育児に追われてしまうために、自分の時間を持つことすら難しい。「今一番欲しいもの」についての質問に「時間」と答える女性研究者が多かったのは、そのような背景がある。

このように、育児中の女性研究者が研究と育児を両立させることは、精神的にも物理的にも厳しい状況がある。ただし、そのような中でも、研究者人生を長いスパンで考えることによって、自分らしく研究と育児を前向きに捉えることができる例も見られた。しかし、非常勤講師の場合は、1年更新の不安定な立場で先が見通せないために、自分の研究者人生を長いスパンで見ることは難しい。

安定したポストを得るためには、研究で業績を上げる必要がある。しかし、非常勤講師は、研究費を獲得するチャンスも少なく、そこに出産・育児が重なってくると、研究そのものを続けること自体が難しいといったような状況に追い込まれやすい。また、非常勤講師は、実働時間の関係で子どもを保育園に預けることができないという問題をはじめ、「社会的に認められていないのではないか」という不安を抱えていることもわかった。このように、育児中の非常勤講師は、正規の教員との待遇の差も相まって、働きが社会に認められていない不満と先の見えない不安を抱えながら、育児と仕事・研究の両立を図っているのである。

(2) 正規教員と非常勤講師のそれぞれの悩み

同じ女性研究者でも、正規の教員と非常勤講師といった立場の違いによって、不安の内容が違っていることがわかった。正規の教員の場合は、自分の研究が進まないことによって、学会や雑誌で研究成果を出し続ける他の研究者に対し「焦り」を

感じる苦しさや、研究成果を出せないことによってキャリアが進まないなどの「不安」はあるにしても、研究者人生を長いスパンで見ることができるため、現状を前向きに捉えていくことができる面もある。一方、非常勤講師などの場合は、不安定な立場であるがゆえに、「研究を続けていけるのだろうか」といったような、より「切実な不安」を抱いているのである。

(3) 周囲のサポートの必要性和家事・育児の分担のあり方

育児中の女性研究者が研究を続けていくためには、周囲のサポートが必要である。特にパートナーの家事・育児の分担や家族のサポートは不可欠のように思われる。本調査に協力していただいた女性研究者たちの家庭においては、パートナーによる家事・育児の分担があるということが明らかになった。しかし、そのような中でも、結婚や育児の事情を通して、パートナーとの分担が性別役割分担意識に基づく形で、同じ働く者同士でも、女性の方が主体的に「家事・育児役割」を引き受けている例が見られた。

その一方で、女性研究者の方が「稼ぎ手」となり、パートナーが「家事・育児役割」を果たし、女性研究者の仕事や研究をサポートするという役割分担の例も見られた。

しかし、仮に男性側が、例えば育児を優先させたいと思っても、職場の雰囲気などから育児休業を満足に取りやすい状況ではないこともわかった。男性が育児に積極的に関わろうとする意向を汲みあげ、男性にとっても「仕事と育児」の両立がしやすいような諸制度の整備や意識の改革が、職場あるいは社会全体において望まれる。

(4) 自分らしい研究と育児の両立に向けて

女性研究者は、研究と育児の両立において、大学およびアカデミックな世界の持つ仕組みがもたらす困難と、家庭や職場でのジェンダー問題に由来する困難という、二重の困難を抱えがちであることがわかった。

また、女性研究者たちは、研究と育児を両立させる上で、ストレスを抱えがちである。しかし、その一方で、幸福度も高いこともわかった。それは仮に将来への不安を抱えている不安定な立場であっても、である。そこには、女性研究者の「語り」にもあったように、研究者は、学び続けられる環境において、自分の興味・関心のあることを仕事にすることができている幸せがあるからである。今回の聞き取り調査の中では、そういった幸せに加えて、「子どもの存在」や育児の経験が研究者としての仕事にポジティブな影響を与えている様子も見受けられた。このような視点からも、「研究をしたい」「研究を続けていきたい」という育児中の女性研究者たちが、研究者人生を途中で諦める、断念するといったことは避けなければならない。

置かれている状況や立場に関わらず、「研究をしたい」と思っている育児中の女性研究者たちが、自分らしく研究と育児を両立し、理想的なワーク・ライフ・バランスを実現させるためには、柔軟に対応できる研究環境づくりが必要である。

2 今後の課題と提言

本調査では、女性研究者が研究と育児を両立させる上で抱く具体的な問題を明らか

にしてきたつもりである。しかし問題の本質を考える上では、女性研究者が困難に置かれるメカニズムを社会構造的な部分からより深く掘り下げることが必要であった。両立における不安や焦りは、個人の問題としてではなく、社会構造の問題として考えられるべきであるからである。今回の調査ではそこまで行うことができなかったため、この点については、今後の課題としたい。そのような反省も抱えつつ、最後に、女性研究者たち一人一人の姿を取り上げる中で見えてきた現実的な課題を踏まえ、女性研究者の研究環境がより良いものになることを願って、2点の提言を行い本調査の結びとしたい。

(1) 大学内の子育てサポートの仕組み（施設・機会）づくり

今回の調査において、育児中の女性研究者が研究を続けていくためには、パートナーの家事・育児の分担や周囲のサポートが必要であることはこれまで述べてきたとおりである。聞き取り調査の中で、サポートに関しては、実家や保育園や幼稚園、またベビーシッターの利用などが挙げられた。

ここで注目したいのが、大学内のサポート施設やサポート事業についてである。福岡県内の大学においても、九州大学や九州工業大学などに男女共同参画推進室が設置され、女性研究者の出産・育児・介護等のライフイベントやワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備、研究力向上のための取り組みが進められている。聞き取り調査の中では、学内の支援事業について、サポートを利用することによって、満足している様子がうかがえた。しかし実際に支援制度があっても、それを受けられるかどうか悩む例も見られた。支援を受けたいと思った女性研究者が支援を受けやすくなるためには、制度が整えられることだけでなく、職場の上司や育児経験者の理解など、支援する側からのソフト面でのサポートも必要である。

その一方で、大学によるサポートに関して、非常勤講師の中には、そのようなサポートが存在していることすら知らない、といった声もあった。大学によって、さまざまな支援事業が行われてはいるが、1つの大学に所属しているわけではない非常勤講師の場合は、そのサポートを受ける「入口」にすら、たどり着くのも難しいことがわかる。非常勤講師も、大学教育にとって不可欠な存在であるのだから、大学において、非常勤講師へのサポート策が何らかの形で検討されていくことを期待したい。

いずれにしても、大学において、置かれている立場や状況に関わらず、サポートを必要とする者にサポートを受けることができる機会が満遍なくもたらされるような仕組みづくりが必要とされている。

(2) 女性研究者同士のネットワークづくり

育児中の女性研究者をめぐる環境がより良いものになっていくためには、女性研究者たちが、日々奮闘している姿をもっと世の中に提示していくことが必要なのではないかと考える。実際に、聞き取り調査の中でも、他の女性研究者がどのように研究と育児を両立させているのかを知りたいといったような声も聞かれた。

今回の調査では、研究も育児もどちらも全力で取り組もうとしている例、長いスパンで考えることによって今は育児を優先させている例や、周囲のサポートを得て研究を優先させている例などを取り上げた。研究と育児の両立のあり方は、人それぞれで、さまざまな形があって良いのである。そして、誰かの研究と育児の経験が

誰かのロールモデルになる可能性もある。

筆者は、特に一般的なメディア記事に取り上げられるような、家事・育児をこなしつつ研究・教育でも業績を上げ、キャリアを重ねているスーパーウーマンのロールモデルだけでなく、研究と育児の両立に悩み、つまりき、キャリアを思うように積むことができなかつたり、あるいは、思うようにならない育児に悩んだりする、そんな「身近な」ロールモデルが、悩む女性研究者には寄り添ってくれるのではないかと考える。そのためには、正規の教員、非常勤講師に関係なく、さまざまな立場の女性研究者たちが、女性研究者特有の悩みを相談し合い、意見を共有する場が必要である。

また今回の調査を通しては、仕事と育児に追われていると自分自身をゆっくり振り返るという時間がなかなか持てないので、言葉にして話をするだけでも気持ち前向きになる感じがしたという声もあり、今回の調査自体が、女性研究者同士の悩みを共有する時間として機能したこともわかった。筆者自身も、聞き取り調査を行い、女性研究者のリアルな声に触れることができたことは、両立の大変さや葛藤に共感したり、どんなに大変でも研究に真摯に向き合う姿に憧れを抱いたり、これからの研究者人生を考える上で、とても貴重な機会となった。

以上のことを踏まえて、筆者は、女性研究者同士でざくばらんに研究や育児のことを話すための環境・ネットワークづくりの重要性を感じた。今後も引き続き、育児中の女性研究者が抱える問題に関心を持ち、大学内のサポート施設やサポート事業に頼るだけでなく、身近な場面で、女性研究者同士が交流を行い、悩みを共有し、前に進んでいくことができるような、そういった仕組みを構築していくことを目指していきたい。

おわりに

筆者は今3歳になる娘を育てながら研究活動を行っています。この調査・研究に取り組もうと思ったのは、まさに筆者自身が研究と育児の両立に悩んでいたことがきっかけです。

筆者の場合は、博士課程在籍中での妊娠・出産であったため、博士論文の執筆と育児を両立させていかなければなりません。子どもが1歳になり、保育園に入れることを考えましたが、筆者の非常勤講師としての仕事がフルタイム労働ではないために、「点数」が低く、入園させることができませんでした。自宅で子どもが寝ている間しか満身に論文執筆する時間を持つことができない日々は、なかなか研究が進まないという焦りもあり、体力的にも精神的にもとても厳しいものでした。日中は常に睡眠不足で、子どもに対し、優しい母親になれない時もありました。自分の子どもにさえ優しくできないのなら、研究を諦めた方がいいのではないかと考えることもありました。独りで葛藤していた当時の筆者にとって、研究と育児の両立はとても難しいことのように感じられました。そういった日々の中で、他の育児中の女性研究者たちがどのような生活を送っているのかを知りたい、そして育児中の女性研究者たちが、自分らしくいられるワーク・ライフ・バランスのあり方はどのようなものなのだろうかということについて考えたいと思いました。

その後2020年3月に無事、博士号を取得することができ、また同年4月から娘が幼稚園に入園し、これからまた研究に力を入れていきたいと思っていた時、以前、とある先生にアドバイスいただいた、「当事者としての問題意識を、研究につなげていくべきだ」との言葉が頭に浮かび、今回このテーマで、ジェンダー問題 調査・研究支援事業に応募し、取り組ませていただくことになりました。専門は近代日本史である私にとって、新しい挑戦でした。

しかし新型コロナウイルスの感染拡大が思った以上に生活に影響を与え、幼稚園も登園自粛の日々が続き、再び、研究と育児の両立の難しさに直面する日々が続きました。今回のこの調査・研究は、まさに筆者自身、研究と育児の両立におけるさまざまな葛藤の中で、行うことになったのです。駆け出しの女性研究者が、研究と育児を両立させていくことは、本当に難しい。それが、現時点での筆者の本音です。

そのような新型コロナウイルスの影響もあり、思うようにスケジュールが進められず、関係者の方々にご迷惑をおかけいたしました。無事、調査・研究の結果を報告書にまとめることができました。

今回の調査・研究に当たって、まず、お忙しい中、調査にご協力いただいた女性研究者の方々にご心より御礼申し上げます。女性研究者の皆さま一人一人にお話をうかがう中で、両立の大変さや葛藤に共感したり、どんなに大変な中でも研究に向き合うお姿に憧れの気持ちを抱いたりしたことは、筆者自身、これからの研究者人生を考える上で、とても貴重な経験になりました。

次に、今回の調査を始めるに当たって、調査の方向性や研究倫理についてのアドバイスを与えてくださり、また女性研究者の方々を紹介してくださった、九州工業大学の安河内恵子教授にご心より御礼申し上げます。お忙しい中、筆者が悩むたびに、何度も何度も、ご指導くださいました。先生には、「研究者としてのあり方」も教えていただいたように思います。

また、千葉経済大学短期大学の波多野名奈准教授にも心より御礼申し上げます。波多野先生が大学院生時代に書かれた、女性大学院生の研究と育児の両立における葛藤についての論文をインターネットにて拝読し、アドバイスをいただけないか、先生の所属する大学を通して、連絡をさせていただいたところ、すぐにお返事をくださり、「このテーマは今後の学术界においてもっと議論されるべき問題」であるとして、見ず知らずの駆け出し研究者の私に、「協力は惜しみません」と言ってくださったこと。実際に調査の取り組み方や心構えに至るまで、メールにてご指導いただき、大変心強かったです。

このように、専門家の先生方にたくさんアドバイスをいただきましたが、今回の調査・研究においては、女性研究者たちが研究と育児の両立において、いかに問題を抱えているかという事例紹介にとどまり、問題意識を社会構造的な視点で十分に捉えることができませんでした。この点を、今後の課題としたいと思っています。

調査・研究の立案の段階から報告書にまとめるまで、サポートしてくださった北九州市立男女共同参画センター・ムーブ関係者の皆さまに御礼申し上げます。

また、報告書を作成するに当たって、2人の育児をしながら、データ整理の手伝いをしてくださった松本淑乃さんにも御礼申し上げます。そして、研究の応援をしてくれた夫、育児のサポートをしてくれた実家の両親にも感謝します。

最後に、今回の調査が、育児中の女性研究者の支援に少しでも役に立つこと、そして、これから、「研究を続けたい」と思っている育児中の女性研究者たちが、もっと無理のない形で、研究と育児を両立させていくことができるような研究環境が整えられていくことを願って、本報告を終わります。

西南学院大学
平川 知佳

引用・参考文献一覧

■引用文献・資料

- ・天野正子「女性研究者の地位と役割構造」金城学院大学『金城学院大学論集』79号、1978年
- ・大阪府「男女共同参画に関する府民意識調査」2019年
- ・厚生労働省「平成28年度雇用均等基本調査」2017年
- ・厚生労働省委託調査「平成27年度仕事と家庭の両立支援に関する実態把握のための調査研究事業報告書 労働者アンケート調査結果」2017年
- ・国立社会保障・人口問題研究所『第6回全国家庭動向調査報告書』2019年
- ・篠原さやか「女性研究者のキャリア形成とワーク・ライフ・バランス」労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』62号、2020年
- ・男女共同参画学協会連絡会「第四回 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」2017年
- ・内閣府『男女共同参画白書 令和元年版』2019年
- ・内閣府『男女共同参画白書 令和2年版』2020年
- ・内閣府『平成20年度少子化施策利用者 意向調査の構築に向けた調査報告書』2009年
- ・内閣府『平成29年版少子化社会対策白書』2018年
- ・波多野名奈「研究と子育ての両立をめぐる葛藤－女性大学院生への聞き取り調査から－」『日本教育学会大会研究発表要綱』68巻、2009年
- ・福岡県『令和2年度県民意識調査報告書』2020年
- ・福岡県人づくり・県民生活部男女共同参画推進課『男女共同参画社会に向けての意識調査報告書』2020年
- ・早稲田大学女性研究者支援総合研究所『研究者養成のための男女平等プランに関する調査（4）若手研究者の現状と支援ニーズ調査報告書』2007年

■参考文献・資料

- ・新井浩子ほか「女性研究者のキャリア形成支援：文系・女性・非常勤講師を事例として」『日本教育学会大会研究発表要項』70巻、2011年
- ・小池裕子「私立大学における非常勤講師の雇用問題に関する試論的考察－USRの視点から－」『日本経営倫理学会誌』第21号、2014年
- ・笹倉万里子「非正規雇用女性研究者の問題」『日本の科学者』vol.55、2020年
- ・坊農真弓「視点 女性研究者のリアル－その3「輝く」ために断る勇気」『情報管理』60巻12号、2018年
- ・松並知子ほか「女性研究者が抱える問題－インタビュー調査を通して－」『日本心理学会大会発表論文集』73巻、2009年
- ・八幡（谷口）彩子「女性研究者支援モデル育成事業からみた「家庭生活」と「コミュニティ」の関係性」『家政学原論研究』42巻、2008年
- ・早稲田大学女性研究者支援総合研究所『研究者養成のための男女平等プランに関する調査（2）大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書（聞き取り調査編）』2007年
- ・レイフィールド典子「非正規女性教員・女性研究者の労働と研究環境－沖縄県のアンケート調査から」『日本の科学者』vol.55、2020年
- ・JSA女性研究者・技術者調査チーム「不安定雇用の女性研究者の実情－不安定雇用の立場の女性研究者に関する質的調査結果の中間報告」『日本の科学者』vol.55、2020年

調査票 1

令和2年 月 日

女性研究者の研究と育児の両立における実態調査についてのご協力をお願い

拝啓

時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は西南学院大学において、非常勤講師・博士研究員をしております、平川知佳と申します。女性研究者の「ワーク・ライフ・バランス」について関心を持ち、ジェンダーの視点からの研究を行っております。

このたび、北九州市立男女共同参画センターの令和2年度「ジェンダー問題 調査・研究支援事業」の助成を得て、「女性研究者の研究と育児の両立における課題」についての研究に取り組むこととなりました。

近年では、文部科学省による女性研究者支援に関わる取り組みをはじめ、福岡県内の大学においても、男女共同参画や女性研究者支援室の設置がすすめられ、女性研究者を取り巻く環境は改善されてきています。しかし他方、現実的には、女性研究者としての「ワーク・ライフ・バランス」についての葛藤を一人で抱え込んでしまっている女性研究者も多いように思われます。

以上の状況を鑑み、上記の助成を得て、福岡県内の大学において、研究活動を進めながら、主に、出産・育児というライフイベントを体験している女性研究者の方を対象に、「女性研究者の研究と育児の両立における実態調査」を実施させていただくことといたしました。

つきましては、大変ご多忙の中、勝手なお願いを申し上げ、誠に恐縮に存じますが、当事者の方に質的なインタビューをさせていただきたく、課題の把握と今後の方策について模索する機会を頂戴できればと願っているところでございます。具体的には、別紙の「研究実施計画」に記載しておりますように、育児中の女性研究者を取り巻く現在の状況を把握し、女性研究者たちが、研究活動と育児の両立—「研究者としてのキャリアを重ねること」と「母としての役割を果たすこと」の間で、具体的にどのような問題に直面しているかを明らかにし、女性研究者にとっての理想的な「ワーク・ライフ・バランス」のあり方について考えることができたらと思っております。

ご多忙とは存じますが、研究の趣旨をご理解いただき、ぜひともご協力賜りたく、再度お願い申し上げます。なお、対象者の方々のプライバシー・個人情報等には、十分倫理的配慮を致します。そのほか、何かご不明な点等ございましたら、下記までお問い合わせいただければ幸いです。

それでは、よろしくお願い申し上げます。

敬具

研究実施計画

対象者

福岡県内の大学に所属する出産・育児のライフイベントを体験した女性研究者（教職員、研究員など）

研究のすすめ方

1. 調査期間

・2020年8月～

2. 調査方法および内容

- ・対象者に質的インタビューをさせていただきます。
- ・調査内容については、「女性研究者の研究と育児の両立における実態」について、「プロフィール」、「研究について」、「生活について」、「研究と育児の両立」、「今のご自身について」の5項目をメインに、それぞれいくつかの質問項目を準備しますので、それらについてお話を聞かせていただきます。

3. 調査の実施について

- ・調査の所要時間は約1時間程度を予定しておりますが、新型コロナウイルスの影響を考え、必要最小限の範囲内で、またオンラインでのインタビューも考えております。
- ・インタビューの際、内容をICレコーダーで録音させていただきましたら幸いです。
- ・本調査・研究の結果は、報告書としてまとめる予定です。調査にご協力いただきました方々には報告書をお送りさせていただきます。

4. 倫理的配慮（プライバシー・個人情報の保護等）

- ・本調査において得られた情報につきましては、研究成果の公表の際にはすべて匿名扱いとし、個人情報の保護に最大限配慮いたします。公表前には、内容をご確認賜ります。
- ・得られたデータの管理は、厳重に行い、西南学院大学における「研究資料の保存期間に関する申し合わせ事項」に則り、10年間保存し、その後、一定期間後には、全ての個人情報の完全消去を実施いたします。

アンケート項目

1. プロフィール

あなたご自身についておたずねします。

- (1) 所属部局 ()
- (2) 職種 () (文系/理系)
- (3) 労働形態 (正規/非正規)
- (4) 年齢 (代)
- (5) 出身地 (県) 現在の住まい (県)
- (6) 通勤時間 ()
- (7) パートナーについて (差しさわりのない範囲でお答えください)
 - ① パートナーとの同居
 - a. 同居
 - b. 別居 (県)
 - ② パートナーの労働状況
 - a. 職業 ()
 - b. 労働形態 ()
- (8) 子どもについて (小学6年生までの子ども)
 - a. 人数 (人)
 - b. 年齢 (歳、 歳、 歳、 歳)

2. 研究について

研究を続けていくことに将来の不安はありますか。

とても感じる	ある程度感じる	あまり感じない	感じない
1	2	3	4

3. 生活について

家事・育児についてのパートナーの分担はありますか。

十分ある	ある程度ある	あまりない	全くない
1	2	3	4

4. 研究と育児の両立について

今現在、研究と育児の両立の難しさを感じますか。

とても感じる	ある程度感じる	あまり感じない	感じない
1	2	3	4

子どもが乳幼児の時、ご自身の研究は、どの程度行えている (いた) と思いますか。

十分に行えている (いた)	ある程度行えている (いた)	あまり行えていない (いなかった)	全く行えていない (いなかった)
1	2	3	4

子どもが乳幼児の時、育児は、どの程度行えている（いた）と思いますか。

十分に行えている (いた)	ある程度行えている (いた)	あまり行えていない (いなかった)	全く行えていない (いなかった)
1	2	3	4

インタビュー項目

1. プロフィール
2. 研究について
3. 生活について
 - (1) 結婚について
 - (2) 出産・育児について
4. 「仕事」と育児の両立について
 - (1) 今現在、「仕事」と育児の両立の難しさを感じますか。
5. 今のあなたご自身について
 - (1) 今一番欲しいものは何ですか。
 - (2) 今の生活を送る上でのストレス度について教えてください。
※「ストレスをととても感じる」を10点、「全く感じない」を0点
 - (3) 今の生活を送る上での幸福度について教えてください。
※「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点

調査票2

令和2年 月 日

女性研究者の研究と育児の両立における実態調査についての ご協力をお願い (小学6年生までの子どもを持つ方)

拝啓

時下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は西南学院大学において、非常勤講師・博士研究員をしております、平川知佳と申します。女性研究者の「ワーク・ライフ・バランス」について関心を持ち、ジェンダーの視点からの研究を行っております。

このたび、北九州市立男女共同参画センターの令和2年度「ジェンダー問題 調査・研究支援事業」の助成を得て、「女性研究者の研究と育児の両立における課題」についての研究に取り組むこととなりました。

近年では、文部科学省による女性研究者支援に関わる取り組みをはじめ、福岡県内の大学においても、男女共同参画や女性研究者支援室の設置が進められ、女性研究者を取り巻く環境は改善されてきています。しかし他方、現実的には、女性研究者としての「ワーク・ライフ・バランス」についての葛藤を一人で抱え込んでしまっている女性研究者も多いように思われます。

以上の状況に鑑み、上記の助成を得て、福岡県内の大学において、研究活動を進めながら、主に、出産・育児というライフイベントを体験している女性研究者の方を対象に、「女性研究者の研究と育児の両立における実態調査」を実施させていただくことといたしました。調査結果については報告書としてまとめ、研究内容の報告会も開催する予定です。

つきましては、大変ご多忙の中、勝手なお願いを申し上げ、誠に恐縮に存じますが、当事者の方に「研究と育児の両立に関するアンケート」にご協力いただき、課題の把握と今後の方策について模索する機会を頂戴できればと願っているところでございます。育児中の女性研究者（小学6年生までの子どもを持つ方）を取り巻く現在の状況を把握し、女性研究者たちが、研究活動と育児の両立：「研究者としてのキャリアを重ねること」と「母としての役割を果たすこと」の間で、どのような問題に直面しているかを明らかにし、女性研究者にとっての理想的な「ワーク・ライフ・バランス」のあり方について考えることができたらと思っております。

対象者の方々のプライバシー・個人情報等には、十分倫理的配慮を行い、調査目的以外に一切使用いたしません。本調査で得られた情報につきましては、研究成果の公表の際にはすべて匿名扱いとし、個人情報の保護に最大限配慮いたします。また、集計後責任をもって廃棄いたします。

お手数ですが、ご記入いただいたアンケートは、令和2年9月30日までに、E-mailでご返送をお願いいたします。そのほか、何かご不明な点等ございましたら、下記まで

お問い合わせいただければ幸いです。

ご多忙とは存じますが、研究の趣旨をご理解いただき、ぜひともアンケートにご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

敬具

西南学院大学

平川 知佳

研究と育児の両立に関するアンケート (小学生までの子どもを持つ方)

大学名	
お名前	

問1. あなたご自身についておたずねします。

次の(1)～(8)の設問について、回答を記入してください。

- (1) 所属部局 ()
- (2) 職種 () (文系/理系)
- (3) 労働形態 (正規/非正規)
- (4) 年齢 (代)
- (5) 出身地 (県) 現在の住まい (県)
- (6) 通勤時間 ()
- (7) パートナーについて (差しさわりのない範囲でお答えください)
 - ①パートナーとの同居
 - a. 同居 b. 別居 (県)
 - ②パートナーの労働状況
 - a. 職業 () b. 労働形態 ()
- (8) 子どもについて
 - a. 性別 () b. 年齢 () c. 人数 ()

問2. 研究と育児の両立についておたずねします。

次の(1)～(5)の設問について、当てはまる番号に○印をつけてください。

(1) 今現在、研究と育児の両立の難しさを感じますか。

とても感じる	ある程度感じる	あまり感じない	感じない
1	2	3	4

(2) 子どもが乳幼児の時、ご自身の研究は、どの程度行えている(いた)と思いますか。

十分に行えている (いた)	ある程度行えている (いた)	あまり行えていない (いなかった)	全く行えていない (いなかった)
1	2	3	4

(3) 子どもが乳幼児の時、育児は、どの程度、行えている(いた)と思いますか。

十分に行えている (いた)	ある程度行えている (いた)	あまり行えていない (いなかった)	全く行えていない (いなかった)
1	2	3	4

(4) 家事・育児についてのパートナーの分担はありますか。

十分ある	ある程度ある	あまりない	全くない
1	2	3	4

(5) 研究を続けていくことに将来の不安はありますか。

とても感じる	ある程度感じる	あまり感じない	感じない
1	2	3	4

問3. (1)～(2)の設問について、回答を自由に記述してください。

(1) 研究と育児を両立させる上で、苦勞している(していた)点を、可能な範囲で構いませんので、具体的に教えてください。

(2) 研究と育児を両立させる上で、大学内外の子育てサポート施設やサポート事業を利用したことがありますか。ある場合は、利用してよかった点や施設・事業への要望など、自由に記述してください。

【利用したことがある】

ない場合は、利用しない(しなかった)理由や施設・事業への要望など、自由に記述してください。

【利用したことがない】

ご協力いただきありがとうございました。

令和2年度
ジェンダー問題 調査・研究支援事業 報告書
令和3年3月発行

編集・発行 ©北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
情報課
〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11番4号
TEL/FAX (093)583-5082
<https://www.kitakyu-move.jp>
e-mail:move@move-kitakyu.jp



北九州市立
男女共同参画センター

ムーブ

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4 TEL/FAX 093-583-5082